

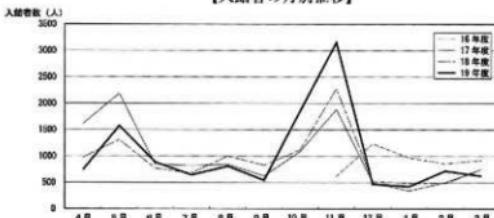
入館者の月別推移は、開館2年目以降、同様な傾向で企画展を開催する5月と11月の2つの月にピークがみられ、逆に9月と12～2月にかけて落ち込む傾向が読み取れる。また、全体に対する団体の割合は、13.2%ではなく13～16%の間に例年推移している。

無料入館日は、5月5日（土・祝）のこどもの日（親子・保護者を対象）46名、関西文化の日の11月17日（土）245名・18日（日）321名の総計612名であった。

【入館者の内訳】



【入館者の月別推移】



* その他は、研修での利用（減免）・ボランティア研修などの来館者。

企画展の入館者は、下表のとおりである。平成19年度の企画展入館者数は、秋季企画展を桜井市と共同企画で実施し、また、シンポジウム等を開催したため、増加した。

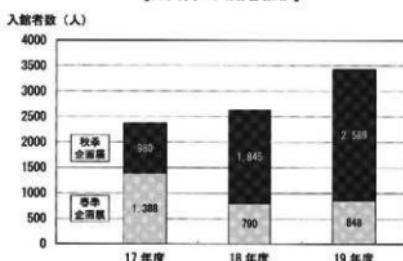
【企画展 入館者数】

問屋 日数	有料入館者		無料入館者				合計
	一般	高・大学生	15歳以下	身障者	招待者	その他	
春季企画展	32	332 (54)	21 (0)	331 (223)	9	15	140 848 (277)
秋季企画展	32	-	-	169	0	47	2,373 2,589
合計	64	332 (54)	21 (0)	500 (223)	9	62	2,513 3,437 (277)

*1 ()は団体入館者の人数（内数）、秋季企画展は無料の為、団体入館数はカウントしていない。

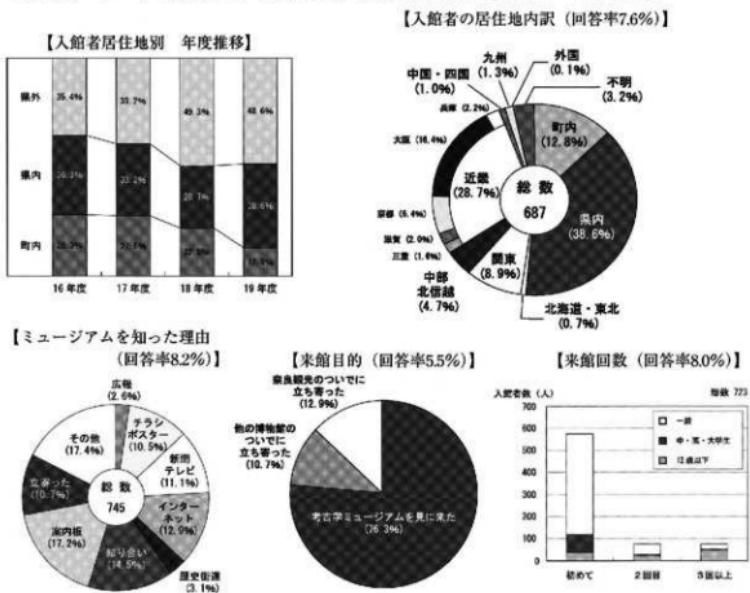
*2 本表「無料入館者 その他」は、「親子無料入館日」・「関西文化の日」の無料入館者を含む。また、秋季企画展は、文化庁の「埋蔵文化財保存活用整備事業」の為、無料とし、本項に含めた。

【企画展の入館者推移】



(2) 入館者アンケート

入館者アンケート（常設展示）を実施した。回答総数735件、回答率5～8%である。



(3) 視察・研修・学校等からの来館

平成19年度は、下記のとおり視察・研修7件133名、学校の利用541名、海外から研究者35名の来館があった。

- 視察・研修 横原市教育委員会（4月12日／3名）・奈良県市町村文化財保存整備協議会（5月31日／20名）和歌山市公民館（7月6日／12名）・文化庁（9月4日／1名）・奈良県青少年指導員協会（1月27日／20名）・守山市埋蔵文化財センター（2月6日／46名）・奈良県婦人教育推進会（2月8日／31名）
- 学校利用 田原本北小学校6年生（4月27日／44名）・河合第1小学校（5月2日／45名）・田原本小学校6年生（5月10日／143名）・平野小学校6年生（6月19日／50名）・奈良女子大学附属小学校3年生（6月27日／43名）・奈良県立養護学校（7月25日／12名、7月26日／10名、7月27日／20名）・奈良大学通信教育（9月1日／60名、2月16日／34名、3月15日／80名）
- 海外研究者 韓国国立公州博物館（4月18日／5名）・忠北大学校・順天大学校・慶北大学校・韓神大学校（7月20日／30名）

(4) ボランティアガイドの実績

ミュージアムの展示品解説ボランティアは、開館以来実施し、当初は「唐古・鍵支援隊」に運営をお願いしていたが、ミュージアム運営がほぼ軌道に乗ったため、平成19年度より当館で運営している。ガイドは年度単位とし、継続更新は可としている。

平成19年度のガイドの登録・稼動人数は38名で、基本的に月2回の午前10時から午後4時（冬季の12月～2月は午前11時から午後3時）までとし、常駐2人体制で実施した。また、団体客等多数の来館の場合に備えて、応援ガイド体制を作りその時間帯のみ臨時に応対してもらうことにした。このような体制のおかげで、延べ562人のガイドが、約4割の来館者に対応することになった（下表）。

ガイドの研修は、5月20日に「唐古・鍵遺跡出土木製品について」、10月6日・7日の両日は「唐古・鍵遺跡の現地研修」を実施した。

【展示ボランティアガイド実績】

月	開館日数	稼動入数 ^{※1}	ガイド人数 ^{※2}	入館者数 (常設展のみ)
4月	25日	44人(1)	240人	552人
5月	27日	44人(2)	339人	923人
6月	26日	47人(4)	498人	883人
7月	26日	45人(3)	298人	642人
8月	27日	48人(4)	306人	812人
9月	26日	52人(4)	228人	538人
10月	26日	49人(4)	353人	934人
11月	26日	49人(5)	364人	1,468人
12月	23日	40人(1)	165人	464人
1月	23日	43人(0)	207人	424人
2月	25日	49人(2)	392人	724人
3月	26日	52人(4)	286人	626人
合計	306日	562人(34)	3,676人(41%) ^{※3}	8,990人

※1 稼動入数の()は、応援ガイド数で内数

※2 ガイド人数は概数

※3 ガイド数／入館者の割合



IV. 資料の報告・紹介

十六面・薬王寺遺跡の木棺墓

清水 琢哉

1.はじめに

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地のほぼ中央、標高47m前後の沖積地に立地する。弥生時代～古墳時代の集落跡、古代の水田跡、保津氏居館跡や薬王寺推定地が重複する複合遺跡である。

遺跡の南東端でおこなわれた今回の第24次調査では、弥生時代後期の落ち込み及び溝・土坑、古墳時代中期～後期の方墳2基・木棺墓1基などを検出した（本書7頁参照）。本調査で検出した木棺墓には棺身が良好な状態で遺存しており、奈良盆地低地部での古墳時代前期末～中期初頭の木棺としては類例が希少であることから、その詳細について報告する。

2.木棺墓SX-101の概要

調査区東半で木棺墓SX-101を検出した。墓壙の主軸は南東～北西で、長軸3m、短軸0.65m、深さ0.4mを測る。断面は浅いU字形で、最下層の灰色粘土（厚さ0.1m）の上に棺身を設置している。粘土床を意識したものであろうか。棺底レベルは南東側が若干高くなっていた。

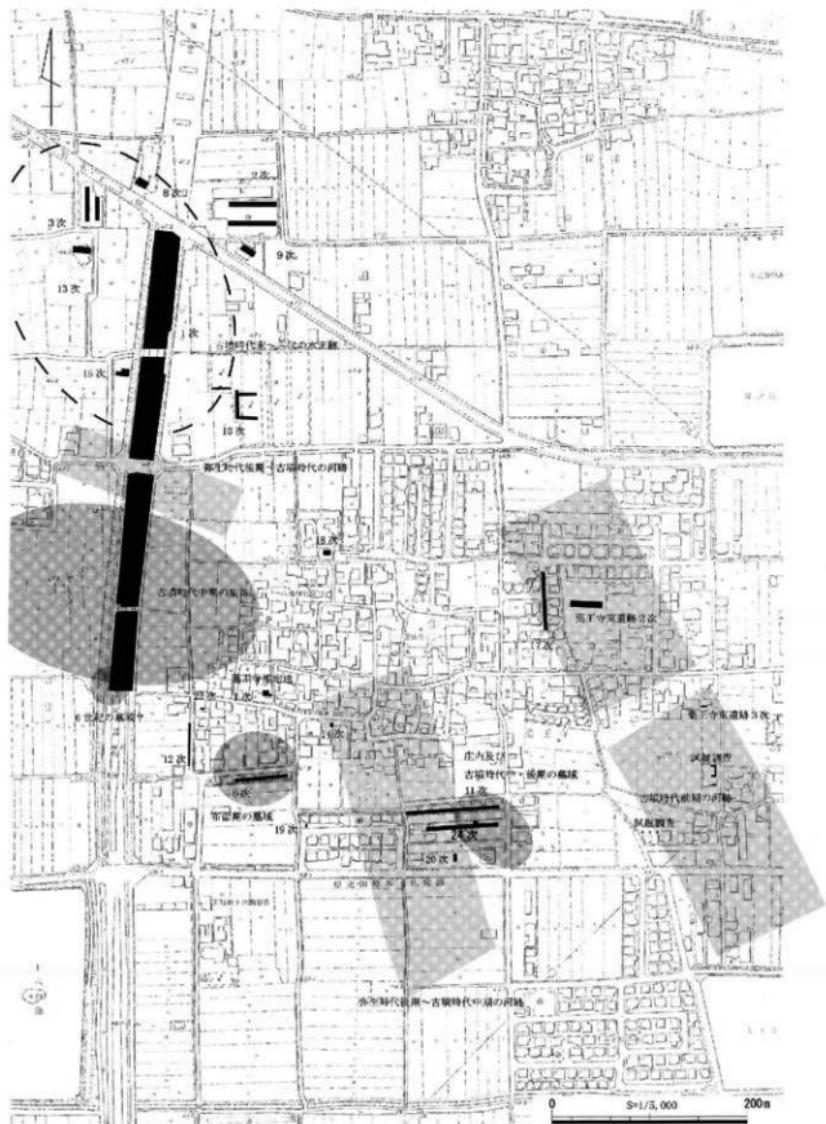
棺身は高さ15cm、幅55cm、全長245cmを測る。外面は円筒状の曲面をもつが、内面底は平坦である。側面も直線的に約45度の勾配で立ちあがる。棺身は棺底中央付近と側面上端付近が最も厚く、4cm前後を測る。屈曲部が最も薄くなっている、南西側では5mm未満まで痩せていた。このため、取り上げ時に南西側屈曲部が一部損壊した。

棺身の南東端より40cm、北西端より10cmの位置に小口板が置かれ、小口板の外側は黄褐色土などのブロック土で充填されていた。南東の小口板はほぼ原位置をとどめているとみられる。北西の小口板は、棺外からの流れ込み土により内側へ倒れた状態で検出した。いずれの小口板も上半が腐朽していたが、下端での厚さは共に2.5cm程度である。北西側小口板は幅約29cm、高さ9cmが残存する。南東側小口板は幅約28.5cm、高さ約7cmが残存する。

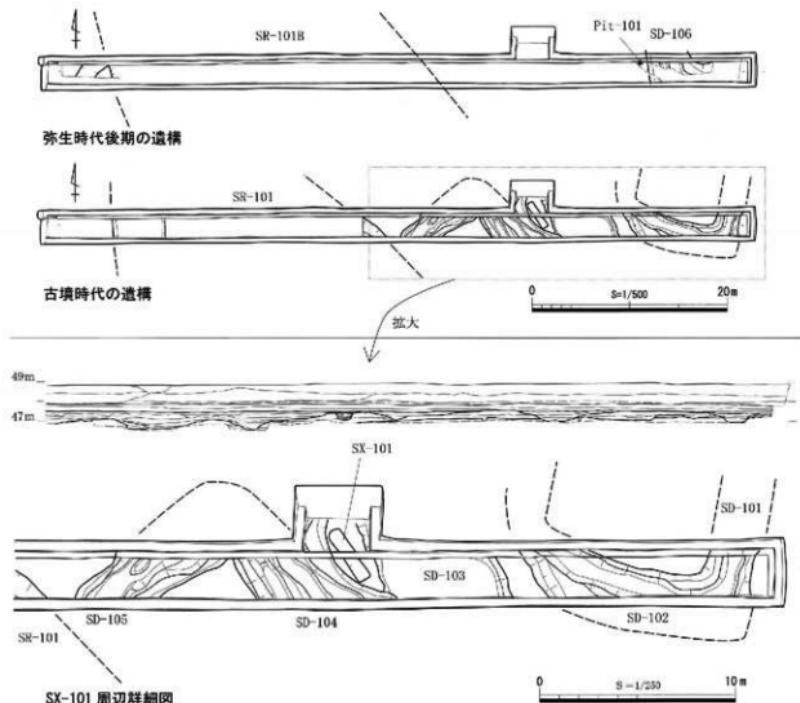
棺蓋は腐朽が進み、土圧により棺内に落ち込んでいたため本来の形状は明らかでない。ただし、南東側小口付近はほぼ原位置を保っており、その断面形状から割竹形木棺であったと考えられる。蓋と身を合わせた断面形状はやや平坦で円筒よりもレンズ状にちかい。金原正明氏の樹種同定によると棺材は身・蓋ともにコウヤマキである。

棺蓋上の堆積土は、墓壙を埋めるためのブロック土が棺材の腐朽により落ち込んだものとみられる。棺蓋上の厚さ約15cm程度が墓壙埋め戻し土で、その上に中世包含層の灰褐色粘質土が薄く堆積する。中世包含層形成時に棺蓋の落ち込んだくぼみがあったためか、あるいは中世包含層形成後に腐朽が進行したためにくぼみができる可能性がある。いずれにしても顯著な盛土がなかった可能性が高い。

棺内出土遺物として、滑石製管玉6点、豎櫛1点、不明土製品1点が出土した。このうち管玉6点・豎櫛1点は棺内南東側で出土した。また、管玉出土地点周辺の土を洗浄したところ、歯の残欠



第1図 十六面・秦王寺遺跡における古墳時代の遺構分布概念図



第2図 遺構平面図

が出土している。このことから、頭位は南東であったと考えられる。そして、被葬者の頭部は棺内東寄りに位置していたようである。なお、落ち込んだ棺蓋の断面形状は棺中央でやや膨らみ、棺身両幅付近は棺底付近まで落ち込んでいる。これは粘土化した人体が棺中央にあったためとみられ、被葬者は基本的に棺中央に埋葬されていていたと考えられる。従って被葬者は1人であった可能性が高い。

北西側小口板付近西寄りの棺内で用途不明の土製品の破損品を検出した。意図的な副葬品であるかどうかを含めて今後の検討が必要である。

6点の滑石製管玉は、直径3.0~3.5mmで、全長11.5cm前後のもの2点、14cm前後のもの2点、16~17cmのもの2点である。古墳時代前期末~中期前半頃の遺物となる可能性が高い。堅櫛は、櫛歯部分が腐朽して残存せず、漆膜部分のみ遺存していた。幅2.15cm、残存長1.6cm、厚さ3mm。

3. 墓域の構成について

次に、本調査で検出した古墳 2 基と木棺墓との関係を整理しておきたい。

1 号墳は、S X - 101 の東側約 10m に位置する古墳である。南側周濠 S D - 102 及び東側周濠 S D - 101 を検出した。S D - 102 の主軸は西北西 - 東南東である。南側周濠の南西側肩での屈曲状況から、1 辻 10m 未溝の小規模な方墳となる可能性が高い。主体部の位置は調査区外とみられるが、削平により遺存していない可能性が高い。出土遺物の大半は弥生土器であるが、下層から 6 世紀代とみられる埴輪片、中・上層から埴輪片及び須恵器片が出土している。このことから、本墳は 6 世紀頃の築造と考えられる。

2 号墳は、S X - 101 の西側に隣接する古墳である。北東側周濠 S D - 104、北西側周濠 S D - 105 を検出している。規模は不明であるが、方墳となる可能性が高い。削平により主体部は遺存しない。S D - 104 が北西 - 南東方向、S D - 105 が北東 - 南西方向である。本墳も出土遺物の大半が弥生時代後期の土器であり、本墳に伴うとみられる遺物は少量の埴輪片及び土師器のみである。小片であるため詳細な時期は明らかにできなかった。なお、上層からは 6 世紀代とみられる須恵器片も出土している。

木棺墓 S X - 101 は 2 号墳に隣接し、主軸はほぼ S D - 104 と一致している。従って、2 号墳と密接な関係をもつて周濠外に設置された木棺墓であると考えられる。後述するように顯著な盛土をもつていなかつた可能性が高く、2 号墳に対して從属的な位置を占めていたと考えられる。ただし、S D - 104 東肩の北端が北東方向に折がっていることから、溝を共有する別の古墳が 2 号墳の北西に隣接していた可能性は残る。

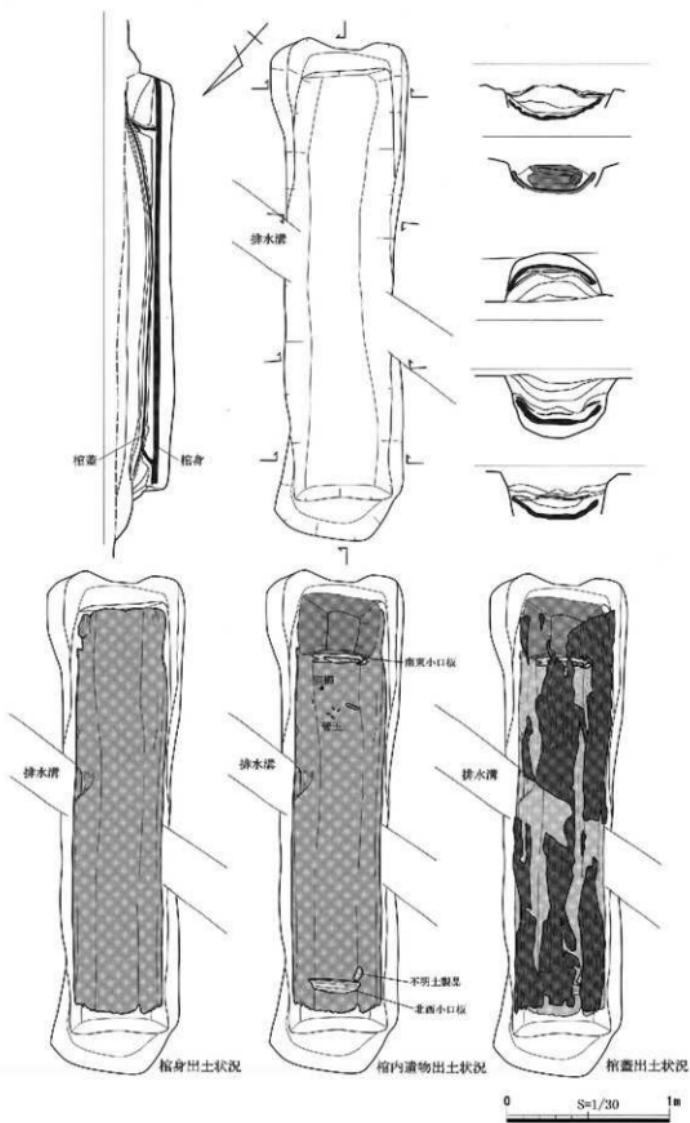
なお、北側に隣接する第 11 次調査では、須恵器壺による土器棺墓とみられる遺構を検出している。方墳とその周囲の木棺墓・土器棺墓によって墓域が構成されていたものであろう。

4. 十六面・薬王寺遺跡における墓域と木棺墓の位置づけ

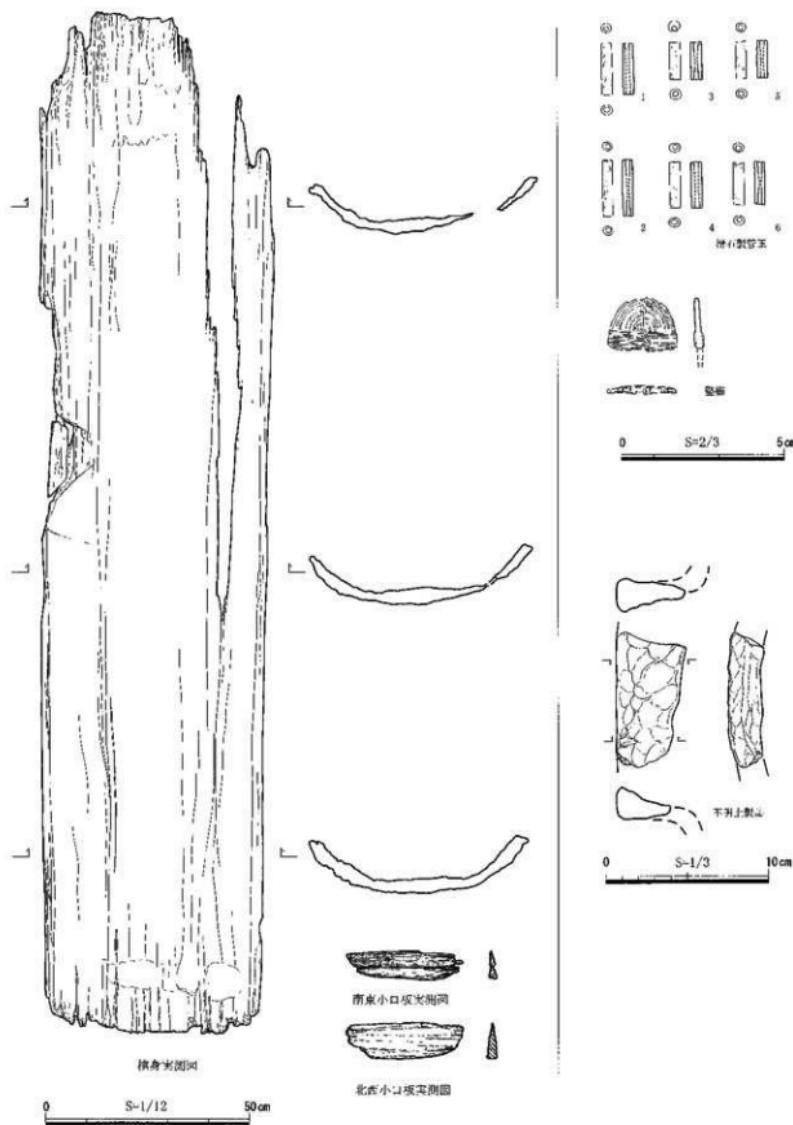
十六面・薬王寺遺跡では、本調査における方墳・木棺墓以外にも墳墓関係の遺構を検出している。本調査の北側に隣接する第 11 次調査では、前述の土器棺墓 1 基のほか、庄内期の円形周溝墓 1 基を検出している。また、弥生時代後期末頃の河跡を挟んで西側 200m に位置する第 6 次調査では、布留期の方形周溝墓群を検出しており、十六面・薬王寺遺跡の南東部では庄内期以来、墓域としての土地利用が続いているのである。一方、本調査地の西側約 400m に位置する十六面・薬王寺遺跡第 1 次調査（南調査区）では古墳時代中期の集落跡を確認している。今回検出した方墳及び木棺墓はこの集落に伴う墓域となる可能性がある。ただし、第 1 次調査地南端で後期の方墳 1 基を検出していることで、6 世紀代には集落域南部にも墓域が設けられているようである。

なお、第 1 次調査（北調査区）及び第 8 次・13 次・15 次調査では古代の水田遺構を検出している。一部は古墳時代末頃まで遡る可能性があり、古墳時代集落の生産域を考える上で参考となろう。

調査にあたり、岡林孝作・小池香津江・広瀬時習・深澤芳樹各氏に多大なご教示をいただきました。文末ながらここに厚く御礼申し上げます。



第3図 S X - 101遺構平面図及び断面図



第4図 木棺及び棺内出土遺物実測図

附. 管玉石材の石種とその産地について

奈良県立橿原考古学研究所 共同研究員
奥田 尚

十六面・薬王寺遺跡第24次発掘調査のSX-101遺構の木棺内から出土した管玉の石材を肉眼で観察した。同質の石材が採取できる遺跡から一番近い場所を石材の採取地とした。使用されている石種は滑石Aと滑石Bである。

滑石A：管玉-6　　色は暗灰褐色で、片理が非常に弱い。輝石と滑石がみられる。輝石は黒色、粒状で、粒径が0.2~0.3mm、量が中である。滑石は灰色透明、粒径が0.2~0.3mm、量が多い。

このような岩相を示す石は朝来市八鹿付近に産する滑石の岩相の一部に似ている。

滑石B：管玉-1~5　　色は暗緑色で、片理が非常に弱い。白雲母、輝石、滑石がみられる。白雲母は無色透明、粒径が0.1~0.2mm、量がごくわずかである。輝石は黒色、粒状で、粒径が0.1~0.2mm、量が多い。滑石は灰色、黒色で、粒径が0.2~0.3mm、量が多い。

このような岩相を示す石は朝来市八鹿付近に産する滑石の岩相の一部に似ている。

管玉6点の鉱物構成はほぼ同じ場所における岩相の違いの範疇におさまることから、同じ地域で採石された原石と推定される。奈良盆地内の遺跡から出土している和歌山市の貴志川流域や兵庫県相生市の大泊付近と推定される滑石とは異なる。



写真1 SX-101棺内出土管玉 (実大)

第1表 SX-101棺内出土管玉一覧表

写真番号	遺構	層位	取上番号	石種	全長 (単位:mm)	直徑 (単位:mm)	重量 (単位:g)	備考
1	SX-101	第6層	S-605	滑石B	15.89	3.35	0.26	
2	SX-101	第5層	南半東	滑石B	17.3	3.46	0.3	棺内の上洗浄時出土
3	SX-101	第6層	S-601	滑石B	11.64	3.48	0.23	
4	SX-101	第6層	S-603	滑石B	14.23	3.57	0.26	
5	SX-101	第6層	S-602	滑石B	11.51	3.21	0.16	
6	SX-101	第6層	S-604	滑石A	13.63	3.27	0.22	

※写真1の番号及び第1表の写真番号は第4図の番号に対応



田原本町所在古墳出土木製品の観察と樹種同定

田原本町教育委員会

藤田 三郎

奈良県立橿原考古学研究所

鈴木 裕明・岡林 孝作

パリノ・サーヴェイ株式会社

高橋 敦・辻本 裕也

1. はじめに

田原本町内で周濠から木製樹物が出土した古墳には、黒田大塚古墳（前方後円墳）、笠鉢山2号墳（円墳）、唐古・鍵4号墳（前方後円墳）がある。黒田大塚古墳出土の木製樹物には、第1次・第4次調査で出土した笠形木製品・鳥形木製品（田原本町教育委員会1984・1997）、笠鉢山2号墳出土の木製樹物には、笠形木製品・石見型木製品（田原本町教育委員会2005）、唐古・鍵4号墳出土の木製樹物には、唐古・鍵遺跡第72次調査で出土した笠形木製品・鳥形木製品（田原本町教育委員会1999）がそれぞれある。

奈良県立橿原考古学研究所では、平成18～20年度科学研究費補助金・基盤研究（B）「古墳時代におけるコウヤマキ材の利用実態に関する総合的研究」（研究代表者 岡林孝作）として、多くがコウヤマキを用材とする木棺・木製樹物を対象とした調査を実施し、資料化・考察を進めている。その一環として今回は、田原本町教育委員会が保管する上記3古墳から出土した木製樹物及び共伴する他の木製品の用材と形態、木取りなどの確認を目的として、田原本町教育委員会と共同調査をおこなった。本稿はその調査成果報告である。

調査にあたっては対象遺物を藤田三郎が用意し、奈良県立橿原考古学研究所 鈴木裕明・岡林孝作が観察、パリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦・辻本裕也が樹種同定試料の採取をそれぞれおこなった。調査は黒田大塚古墳・笠鉢山2号墳・唐古・鍵4号墳周濠出土木製品を対象とする第1回日を2007年10月に、補足調査として笠鉢山2号墳・唐古・鍵4号墳周濠出土木製品を対象とする第2回日を2008年11月に、それぞれ唐古・鍵考古学ミュージアムにおいて実施した。（鈴木）

2. 古墳の概要と木製品の出土状況

（1）田原本町内の古墳の概要

奈良盆地の中央部に位置する田原本町は、標高50m前後の沖積地にあたり、盆地内の低地部を形成している。このような地形的な特徴のため、盆地周辺に比較して大古墳や大規模な古墳群の展開は、現在のところ確認することはできない。しかし、近年の発掘調査では、墳丘が削平され周濠のみ残存する小規模古墳が多数見つかっており、大規模とはいえないまでも、中規模古墳を盟主に小規模古墳が群在する状況がみられ、古墳群を形成していたことが判明しており、これまでの低地部のイメージとは大きく異なる様相を呈してきている（第1図）。これは古代・中世における農耕地



第1図 田原本町内古墳の分布図

の拡大と条里制の整備に伴い、小規模古墳の大半は消滅し、現状では全くわからない状況になったものと考えられるのである。ただし、墳丘規模が50m以上になる中規模古墳は幸いにもかうじて残存し、その面影をとどめている。

田原本町内において墳丘が残存する古墳としては、黒田大塚古墳と笹鉢山1号墳、团栗山古墳など数基の古墳がみられる。これに対して、周濠のみを残す小古墳は、発掘調査等でしか判明しえないが、これらを含めて、現在、町内では55基ほど確認している。大半は10~20m前後的小規模な円墳・方墳である。前方後円墳と推定されるものは、6基ほどで規模は定かでないが30~50mほどのもののが多そうである。これら小規模な古墳は、墳丘が残存していないため、どのような古墳群を形成していたかはおさえることができないが、唐古・鍵遺跡と重複して展開する「唐古・鍵古墳群」では10基、羽子田古墳群と重複する「羽子田古墳群」では28基、笹鉢山1号墳を盟主に展開する「笹鉢山古墳群」では5基ほどの古墳を確認しており、小規模な古墳群が低地部に展開していたと考えられる。

本稿では、古墳の周濠から出土した木製品、特に樹物と思われるものを観察・樹種同定したため、それに関係する古墳について、古墳と木製品について概略をまとめておく。

(2) 黒田大塚古墳

黒田大塚古墳は、田原本町黒田集落の北西部の一角に位置する前方部を西に向かた前方後円墳である。調査は、1983年の第1次調査以来、現在まで5次に及ぶ調査を実施している。いずれの調査も古墳の周濠部分でおこなっており、これらの調査により墳丘・周濠規模を大凡おさえることができている。墳丘全長70m、後円部径40m・前方部幅45m・周濠幅8mに推定できる。復元される古墳墳丘の規模から、低地部の古墳としては最も大きな古墳である。なお、当古墳は、三宅古墳群の最南端に位置づけられるが、当古墳の東方にも後述する笠鉢山古墳群も展開しており、その位置づけは難しい。

現在、見られる墳丘は2段築成の1段目が失われた状態のもので、残存長としては約55mである。周濠は1重と思われるが、古代には埋没していたよう、中世・近世には周濠の両肩を破壊するよう2重の大溝が掘削されており、特に1重目にあたる内側の大溝は、墳丘の1段目を失するような大規模な工事で墳丘に沿うように掘削されている。このような状況から、本墳は、中世以降に大規模な改変がおこなわれておらず、極めて残存状況が悪い古墳といわざるをえない。

しかし、わずかに残った古墳周濠部分から良好とはいえないが遺物が出土している。周濠は確認できるところで、深さが約1mで大きく3分層される。下層は古墳時代の堆積層で、植物を多く含む黒色粘土層である。この土層から木製品等が出土している。第1次調査では、後円部側と前方部北側の周濠下層から笠形木製品2点・鳥形木製品2点が出土している。笠形木製品2点は前方部側から出土しており、いずれも大型でうち1点は完形で残存状態が良好なものである。また、第4次調査においても前方部前面の周濠部において鳥形木製品1点が出土している。このほか、周濠内に斜めに打ち込まれた残存長約120cm、径約20cmの丸太杭や木樋状木製品も出土しており、注目される。

(3) 笠鉢山2号墳

笠鉢山古墳群は、石見遺跡（古墳）と黒田大塚古墳のほぼ中に位置し、八尾集落の北西約400mに展開する。笠鉢山1号墳は、東に前方部を向ける2重周濠の全長96mの前方後円墳、2号墳はその北西20mにあり径26m前後の円墳と推定される。また、これら古墳の北側の八尾九原遺跡第1次調査においても円墳を確認している。特に、笠鉢山1号墳は墳丘の残存状況が良好で、2重周濠を有する点において低地部の古墳としては、重要な古墳である。

笠鉢山1号墳では、第2・3次調査において木製品が出土している。第2次調査で板状の木製品（樹物？）が出土しているが、調査区外に埋没しておりわからない。この他の木製品は、農具等で日立った木製樹物は出土していない。これに対し、2号墳の南側の周濠内からは、多数の埴輪や木製品が出土した。周濠は、幅約3m、深さ1.1mを測り、大きく5層の堆積土によって構成されている。遺物は、墳丘側から崩落した中層と上層から埴輪類が良好な保存状態で出土した。これは、墳丘や埴輪類の崩落が築造後、もなく始まったからであろう。埴輪には、馬形と馬を曳く人物のセットが3組あるほか、円筒埴輪や朝顔形埴輪がある。木製品は、周濠のほぼ中間の中層（黒褐色粘土層／植物腐植上層）から出土しており、埴輪類とはやや異なる。木製品には、笠形木製品10点、石見型木製品1点、用途不明の棒状・板状具などがある。



1. 第1次調査 前方部北側周濠
(北から)



2. 第1次調査
周濠内笠形木製品出土状況
(東から)



3. 第4次調査 周濠内丸太杭出土状況
(西から)

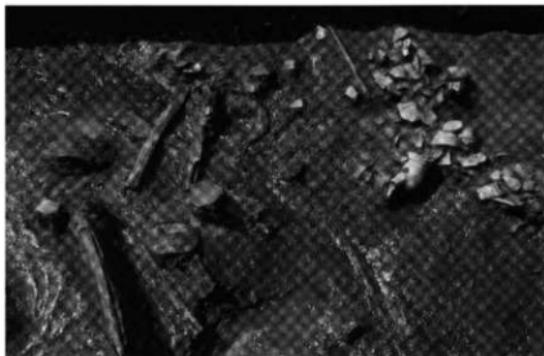
写真1 黒田大塚古墳



1. 周濠内遺物出土状況
(南から)



2. 周濠内遺物出土状況
(北東から)



3. 周濠内木製品出土状況
(東から)

写真2 筒鉢山2号墳



1. 第72次調査
前方部南側周濠
完掘状況
(南東から)
2. 第72次調査
周濠内木製品
出土状況
(東から)
3. 第76次調査
周濠内木製品
出土状況
(東から)

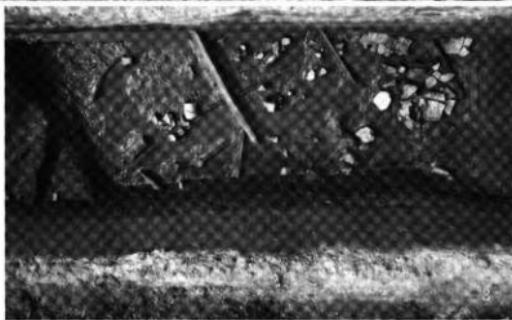


写真3 唐古・鍵4号墳

(4) 唐古・鍵4号墳

唐古・鍵4号墳は、唐古・鍵遺跡第72・76次調査において検出した古墳で、唐古・鍵遺跡の弥生集落のほぼ中央に重複する形で位置している。現状では、ほぼ水田と化し、墳丘は全く存在していないが、一部に畠地があり残丘の可能性もある。

第72・76次調査の調査区は、ほぼ接した形で南北約110mに及び、その調査区北端で4号墳の周濠を検出した。周濠はほぼ東西方向に延長5mにわたって走行するが、周濠幅は東端で約5m、西端で約6.5mを測り、西側でひろがっている。これに対応する周濠を検出しておらず、周濠幅が異なることから、方墳や円墳ではなく南北方向に前方部を向ける前方後円墳で、南側くびれ部付近に相当する可能性が高い。周濠の深さは、検出面から約0.5mで、大きく上下2層に分層される。上層は黒褐色土層、下層は微密な淡灰黒色粘土層で埋没しているが、墳丘側にあたる周濠の北側斜面は墳丘崩落時の砂を含む砂質土層である。この崩落土内には良好な状態で遺物包含されていることから、古墳築造後、まもなく墳丘の崩落が始まっていると考えられる。

埴輪類は、この崩落上層から大量に出土し、周濠外側（南側）に向かって徐々に減少するが、木製品類は周濠のほぼ中央から出土している。埴輪は、両女形・馬形・蓋形などの形象と朝顔形埴輪・円筒埴輪があり、特に蓋形埴輪は良好で、ほぼ完全な形に復元できるものである。木製品には、笠形木製品4点、鳥形木製品2点、用途不明の板状具1点がある。また、(建築)部材が3点あり、内1点は長さ2.5m・約0.1m角である。
(藤田)

3. 出土木製品の観察

黒山大塚古墳・笠鉢山2号墳・唐古・鍵4号墳出土木製品について、概要を第1表¹¹に記した。ここでは比較的良好に遺存していた木製樹物について古墳ごとにその特徴について述べ、分類、位置づけ、木取りなどにも触れてみたい。

笠形木製品及び石見型木製品の各部位の名称及び分類は、(鈴木 2002・2005)に、鳥形木製品の分類は、(坂 2003)にそれぞれならう。なお、今回の資料のなかで数量的に多い笠形木製品については、さきにその分類を示しておく。笠形木製品は、裏面削りが円形で外形に沿う形で内側が削り込まれ、平面円形を呈し、側面半球形などの要素を主体とするモデルにちかい形態（A形態）から、裏面削りが方形で削り込みが小さくなり、平面横円形あるいは歪な円形などの要素を主体とするモデルから乖離した形態（B形態）に大きく変化する。後述するように今回対象とした資料は、ほとんどがB形態である。B形態は、裏面の削りが比較的大きく、中央孔と段・稜をもって区別され、側面からみるとまだ立体感を保っているものが古く位置づけられ、そのなかで高い頂部突起をもつもの（③-a類）、もたないもの（③-b類）に分けられる。B形態は更に省略化が進み、裏面の削り込みが小さくなり、中央孔と裏面の削り込みが区別されなくなり、その断面がハの字ないし垂直になるものへと変化する。それにより側面からみると低平な形状となる。そのなかで高い頂部突起をもつもの（④-a類）、もたないもの（④-b類）に分けられる。モデル自体あるいは用途が異なると考えられる中央孔と同じ大きさで直ぐに貫通しない孔が穿たれるものの（C形態）もあり、比較的大型の（⑤-a類）と小型の（⑤-b類）に分かれる。

黒山大塚古墳の笠形木製品は、直径が40cmを超える大型品¹²（第1表-1（以下、1とし、2以

第1表 黒田大塚古墳・笠鉢山2号墳・唐古・鍵4号墳出土木製品の観察と樹齢同定

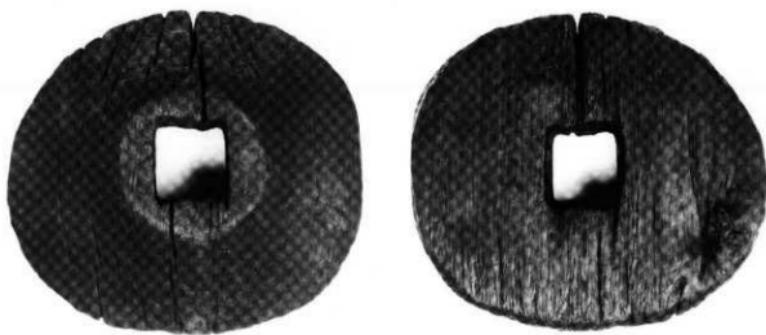
古構名	上段 下段 切妻 腰身	踏檻	通檻	側檻	側檻 中央 側檻	上段 腰身 側檻	側檻	特徴		木取り	その他	樹齢	
								側檻 中央 側檻	側檻 中央 側檻				
写真4 - 1 馬鹿木製品 古墳周縁 (第1水鑿窓)	1 一 一 一 竺形木製品 古墳周縁	KDD-001 -00003SW	42.2 40.0 15.2	42.2 40.0 15.2	42.2 40.0 15.2	前部端は、山形に細かくつたれ、側面には水平な溝を有する。下端部は木板取扱いの跡である。表面には漆が剥げ落ち、漆膜剥離は約3mm程度である。表面では、外見上最も目立つのが、表面に施された漆の剥離痕でもある。	前部端は、山形に細かくつたれ、側面には水平な溝を有する。下端部は木板取扱いの跡である。表面には漆が剥げ落ち、漆膜剥離は約3mm程度である。表面では、外見上最も目立つのが、表面に施された漆の剥離痕でもある。	側面端は、山形に細かくつたれ、側面には水平な溝を有する。下端部は木板取扱いの跡である。表面には漆が剥げ落ち、漆膜剥離は約3mm程度である。表面では、外見上最も目立つのが、表面に施された漆の剥離痕でもある。	側面端は、山形に細かくつたれ、側面には水平な溝を有する。下端部は木板取扱いの跡である。表面には漆が剥げ落ち、漆膜剥離は約3mm程度である。表面では、外見上最も目立つのが、表面に施された漆の剥離痕でもある。	側面端は、山形に細かくつたれ、側面には水平な溝を有する。下端部は木板取扱いの跡である。表面には漆が剥げ落ち、漆膜剥離は約3mm程度である。表面では、外見上最も目立つのが、表面に施された漆の剥離痕でもある。	側面端は、山形に細かくつたれ、側面には水平な溝を有する。下端部は木板取扱いの跡である。表面には漆が剥げ落ち、漆膜剥離は約3mm程度である。表面では、外見上最も目立つのが、表面に施された漆の剥離痕でもある。	側面端は、山形に細かくつたれ、側面には水平な溝を有する。下端部は木板取扱いの跡である。表面には漆が剥げ落ち、漆膜剥離は約3mm程度である。表面では、外見上最も目立つのが、表面に施された漆の剥離痕でもある。	コウヤマキ 14年±6歳
写真4 - 2 馬鹿木製品 古墳周縁 (第1水鑿窓)	2 一 一 一 竺形木製品 古墳周縁	KDD-001 -00001W	26.0 16.5 9.0	26.0 16.5 9.0	26.0 16.5 9.0	前部端は山形の腰檻。側面端は山形に盛り上がり山形を呈し、側面には細い溝をもつ。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。	前部端は山形の腰檻。側面端は山形に盛り上がり山形を呈し、側面には細い溝をもつ。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。	前部端は山形の腰檻。側面端は山形に盛り上がり山形を呈し、側面には細い溝をもつ。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。	前部端は山形の腰檻。側面端は山形に盛り上がり山形を呈し、側面には細い溝をもつ。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。	前部端は山形の腰檻。側面端は山形に盛り上がり山形を呈し、側面には細い溝をもつ。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。	前部端は山形の腰檻。側面端は山形に盛り上がり山形を呈し、側面には細い溝をもつ。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。表面には漆が剥離する。	コウヤマキ 14年±6歳	
写真4 - 3 馬鹿木製品 古墳周縁 (第1水鑿窓)	3 一 一 一 竺形木製品 古墳周縁	KDD-001 -00002W	22.0 19.2 8.5	22.0 19.2 8.5	22.0 19.2 8.5	側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。	側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。	側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。	側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。	側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。	側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。側面端は木方形状である。	コウヤマキ 14年±6歳	
写真4 - 4 馬鹿木製品 古墳周縁 (第1水鑿窓)	4 一 一 一 竺形木製品 古墳周縁	KDD-001 -00001W	20.1 14.3 12.1	20.1 14.3 12.1	20.1 14.3 12.1	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	コウヤマキ 14年±6歳	
写真4 - 5 馬鹿木製品 古墳周縁 (第1水鑿窓)	5 一 一 一 竺形木製品 SD-104 第2層	KDD-004 -00001W	7.0	7.0	7.0	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	コツラノウ コテラノウ コテラノウ	
写真4 - 6 馬鹿木製品 古墳周縁 (第1水鑿窓)	6 一 一 一 竺形木製品 SD-105S 第3-6層	SHK-001 -00008SW	31.5 34.6 7.0	31.5 34.6 7.0	31.5 34.6 7.0	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	コウヤマキ 14年±6歳	
写真5 - 6 馬鹿木製品 古墳周縁 (第1水鑿窓)	7 一 一 一 竺形木製品 SD-105S 第3-6層	SUK-001 -00006W	32.0 33.2 12.0	32.0 33.2 12.0	32.0 33.2 12.0	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	コウヤマキ 14年±6歳	
笠鉢山2号墳 (第1水鑿窓)	8 一 一 一 竺形木製品 SD-105S 第3-6層	SUK-001 -00007W	—	—	—	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	側面端は山形の腰檻。側面端は山形の腰檻。	コウヤマキ 14年±6歳	

8	笠形木製品 写真5-8	SD-102S	第3-b面	SHK-001 -00005W	27.0 28.3 5.6	側面は、下端部から底面にかけて「面平な山形」の形状を形成し、底面には「斜底」を作り出さない。底面には「長方形状」の底面があるが、水すり方向は約3cm。側面は「斜底」である。底面は「斜底」である。斜面は「斜底」である。 側面は、外周に「大輪郭約5cm」の「平底」がある。「底面」は「斜底」である。斜面は「斜底」である。 「底面」には「直角状」の部分がある。底面は「斜底」である。斜面は「斜底」である。 「底面」には「直角状」の部分がある。底面は「斜底」である。斜面は「斜底」である。 「底面」には「直角状」の部分がある。底面は「斜底」である。斜面は「斜底」である。 「底面」には「直角状」の部分がある。底面は「斜底」である。斜面は「斜底」である。	先端に「かくま」 「コカマキ」
9	笠形木製品 写真5-9	SD-102	第1構 (下)	SHK-001 -00001W		側面は「面平な山形」が、底面は「面平な山形」にして「斜底」である。 側面は「面平な山形」が、底面は「面平な山形」にして「斜底」である。 側面は「面平な山形」が、底面は「面平な山形」にして「斜底」である。	先端に「かくま」 「コカマキ」
10	笠形木製品 写真5-10	SD-102S	第3-b面	SHK-001 -00002W		側面は「面平な山形」が、底面は「面平な山形」にして「斜底」である。 側面は「面平な山形」が、底面は「面平な山形」にして「斜底」である。	先端に「かくま」 「コカマキ」
11	笠形木製品 写真5-11	SD-102S	第3-b面	SHK-001 -00003W		側面は「面平な山形」が、底面は「面平な山形」にして「斜底」である。 側面は「面平な山形」が、底面は「面平な山形」にして「斜底」である。	先端に「かくま」 「コカマキ」
12	笠形木製品 写真5-12	SD-102S	第3-b面	SHK-001 -00004W		側面は「面平な山形」が、底面は「面平な山形」にして「斜底」である。 側面は「面平な山形」が、底面は「面平な山形」にして「斜底」である。	先端に「かくま」 「コカマキ」
13	笠形木製品 写真5-13	SD-102S	第3構 (下)	SHK-001 -00007W		側面は「面平な山形」にして「斜底」である。 側面は「面平な山形」にして「斜底」である。	先端に「かくま」 「コカマキ」
14	笠形木製品 写真5-14	SD-102S	東側	SHK-001 -00010W		側面は「面平な山形」にして「斜底」である。 側面は「面平な山形」にして「斜底」である。	先端に「かくま」 「コカマキ」
15	笠形木製品 写真5-15	SD-102S	西側	SHK-001 -00011W		側面は「面平な山形」にして「斜底」である。 側面は「面平な山形」にして「斜底」である。	先端に「かくま」 「コカマキ」
16	笠形木製品 写真5-16	SD-102S	第3-b面	SHK-001 -00013W	長さ 88.8 幅 15.2 厚さ 2.8	側面は「面平な山形」にして「斜底」である。 側面は「面平な山形」にして「斜底」である。 側面は「面平な山形」にして「斜底」である。 側面は「面平な山形」にして「斜底」である。	先端に「かくま」 「コカマキ」
17	用具木製品 (棒状)	SD-102S	第3-b面	SHK-001 -00015W		側面を「丸くする」形状で、断面は円形に「かくま」。	先端? 「コカマキ」
18	用具木製品 (棒状)	SD-102S	第3-b面	SHK-001 -00017W		側面は「面平な山形」で、一端の端面も「つ」。一方の端面は、中央の方の側面を「丸くする」。	「ヒノキ」
19	用具木製品 (棒状)	SD-102S	第3構	SHK-001 -00024W		側面は「面平な山形」で、一端の端面も「つ」。一方の側面を「丸くする」。	「モミノキ」

(単位mm. *は算出する大きさ)

(単位はcm。*は検査する大きさ)

剖面名	上段: 等高 標高 間隔	側壁 標高	側壁 幅	通幅	層位	造物費分 け	下段: 垂直 方角柱			水取り	その他
							内柱: 水平 方向直進	外柱: 水平 方向直進	下段: 突き		
20	---	新形木製品 写真番号 - 20	SD-105	等2層 KRK-072 -00003SW-1	31.4 25.0 12.5	31.4 25.0 12.5	理由は、下端部から頂部に向けて一方の端は直線的な直進となり、もう一方の方は直角の外側には複数の直角な角度が出現している。頭部には複数の直角な角度が現れ、中段には直角底面が現れ、下部には複数の直角な角度が現れる。頭部が水平面に平行する直角面は、外側には複数の直角な角度が現れ、一方の端は直角の直進となる。外側には複数の直角な角度が現れ、一方の端は直角の直進となる。頭部が水平面に平行する直角面は、下部には複数の直角な角度が現れ、一方の端は直角の直進となる。頭部が直角の直進では、中段には複数の直角な角度が現れ、一方の端は直角の直進となる。頭部が直角の直進では、中段には複数の直角な角度が現れ、一方の端は直角の直進となる。	理由は、下端部から頭部に向けて一方の端は直線的な直進となり、もう一方の方は直角の外側には複数の直角な角度が現れ、中段には直角底面が現れ、下部には複数の直角な角度が現れる。頭部が水平面に平行する直角面は、外側には複数の直角な角度が現れ、一方の端は直角の直進となる。頭部が直角の直進では、中段には複数の直角な角度が現れ、一方の端は直角の直進となる。	11.4は完形 (表面が本表)	コリヤマキ (表面が本表)	
21	----- 古・櫛4号 新(徐古・櫛) 通路第22号横 左	笠形木製品 写真番号 - 21	SD-105	等2層 KRK-072 -00003W	22.9 27.9 90	22.9 27.9 90	理由は、下端部から頭部が形成し、頭部には直角な直進である。頭部には直角な直進である。頭部が水平面に平行する直角面をもつ斜角が直角へ、水平方向に未計算の小穴が穿たれており。頭部中央穴が空洞。	理由は、下端部から頭部が形成し、頭部には直角な直進である。頭部には直角な直進である。頭部が水平面に平行する直角面をもつ斜角が直角へ、水平方向に未計算の小穴が穿たれており。頭部中央穴が空洞。	11.4は完形 (表面が本表)	コリヤマキ (表面が本表)	
22	----- 古・櫛4号 新(徐古・櫛) 通路第22号横 左	笠形木製品 写真番号 - 22	SD-105	等2層 KRK-072 -00006W	0.900	0.900	理由は、頭部は直角の山腹が、後元される半圓形には直角山腹が、表面には直角方向に削して鉈形状に変化するひび割れが生じている。頭部は山腹が、後元される半圓形には直角山腹が、表面には直角方向に削して鉈形状に変化するひび割れが生じている。頭部は山腹が、後元される半圓形には直角山腹が、表面には直角方向に削して鉈形状に変化するひび割れが生じている。	理由は、頭部は直角の山腹が、後元される半圓形には直角山腹が、表面には直角方向に削して鉈形状に変化するひび割れが生じている。	直角方向に半 直角山腹をもつ 1/3階段欠橋。	コリヤマキ (表面が本表)	
23	----- 古・櫛4号 新(徐古・櫛) 通路第22号横 左	笠形木製品 写真番号 - 23	SD-105	等2層 KRK-072 0.00004W	1.54 1.11	1.54 1.11	理由は、頭部及び開口部分が直角である。頭部は直角の直進か、頭部と直角か。 わざわざなく頭部と直角か。頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いが直角で長い。頭部は直角で長いが直角で長い。頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いが直角で長い。頭部は直角で長いが直角で長い。頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いが直角で長い。頭部は直角で長いが直角で長い。頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いが直角で長い。	理由は、頭部及び開口部分が直角である。頭部は直角の直進か、頭部と直角か。 わざわざなく頭部と直角か。頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いが直角で長い。頭部は直角で長いが直角で長い。頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いが直角で長い。頭部は直角で長いが直角で長い。頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いが直角で長い。頭部は直角で長いが直角で長い。頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いが直角で長い。	直角山腹をもつ 半圓形欠橋。	コリヤマキ (表面が本表)	
24	----- 古・櫛4号 新(徐古・櫛) 通路第22号横 左	屋造不明品 (複合)	SD-105	等2層 KRK-072 -00001W	-----	-----	理由は、頭部は直角の山腹である。一方の端は直角方向に削して直角を形成する。孔 や縫など他の特と直角方向に削して直角を形成する。孔や縫など他の特と直角方向に削して直角を形成する。	理由は、頭部は直角の山腹である。一方の端は直角方向に削して直角を形成する。孔 や縫など他の特と直角方向に削して直角を形成する。孔や縫など他の特と直角方向に削して直角を形成する。	直角方向に半 直角山腹をもつ 1/3階段欠橋。	ヒノキ (表面が本表)	
25	----- 古・櫛4号 新(徐古・櫛) 通路第22号横 左	(複合)等2 写真番号 - 25	SD-1105	等2層 KRK-076 -00016W	-----	-----	理由は、頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いのが直角で、頭部は直角で長いが直角で長い。頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いのが直角で、頭部は直角で長いが直角で長い。	理由は、頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いのが直角で、頭部は直角で長いが直角で長い。	-----	ヒノキ (表面が本表)	
26	----- 古・櫛4号 新(徐古・櫛) 通路第22号横 左	(複合)等2 写真番号 - 26	SD-1105	等2層 KRK-076 -00013W	-----	-----	理由は、頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いのが直角で、頭部は直角で長いが直角で長い。	理由は、頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いのが直角で、頭部は直角で長いが直角で長い。	-----	ヒノキ (表面が本表)	
27	----- 古・櫛4号 新(徐古・櫛) 通路第22号横 左	(複合)等2 写真番号 - 27	SD-1105	等2層 KRK-076 -00015W	-----	-----	理由は、頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いのが直角で、頭部は直角で長いが直角で長い。	理由は、頭部が直角で長いのが直角で、前面は直角で長いのが直角で、頭部は直角で長いが直角で長い。	-----	ヒノキ (表面が本表)	



1. 笠形木製品
(KDO-001-00003W)



2. 鳥形木製品 (KDO-001-00001W) 3. 鳥形木製品 (KDO-001-00002W)

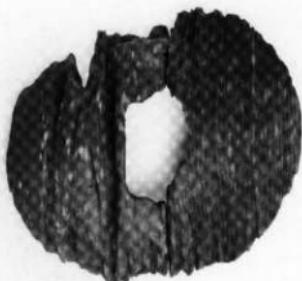


4. 鳥形木製品 (KDO-004-00001W)



5. 丸太杭
(KDO-004-00003W)

写真 4 黒田大塚古墳出土木製品 (1 ~ 4 : 約1/6、5 : 約1/10)



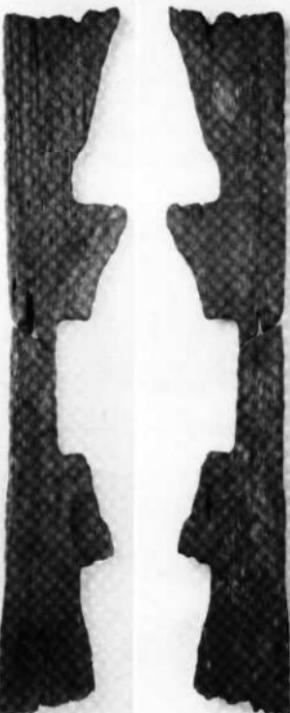
6. 篦形木製品 (SHK-001-00008W)



8. 篦形木製品 (SHK-001-00005W)

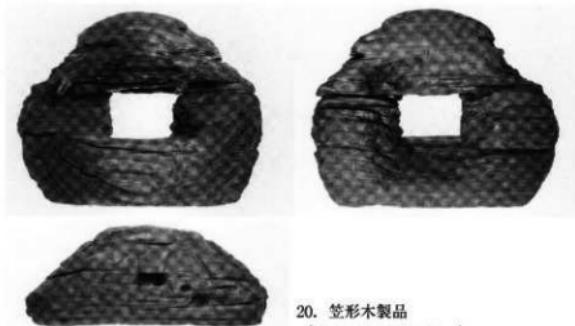


7. 篚形木製品 (SHK-001-00006W)

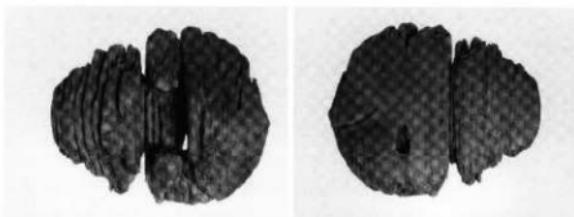


16. 石見型木製品 (SHK-001-00013W)

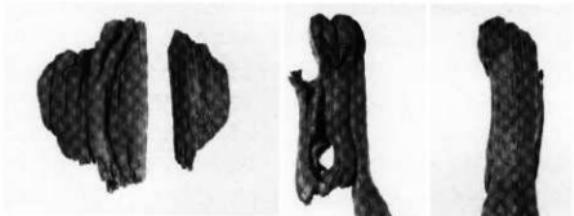
写真5 箕鉢山2号墳出土木製品 (6~8・16: 約1/6)



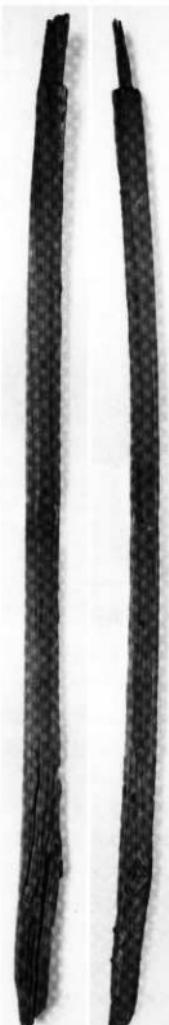
20. 笠形木製品
(KRK-072-00003W-1)



21. 笠形木製品 (KRK-072-00002W)



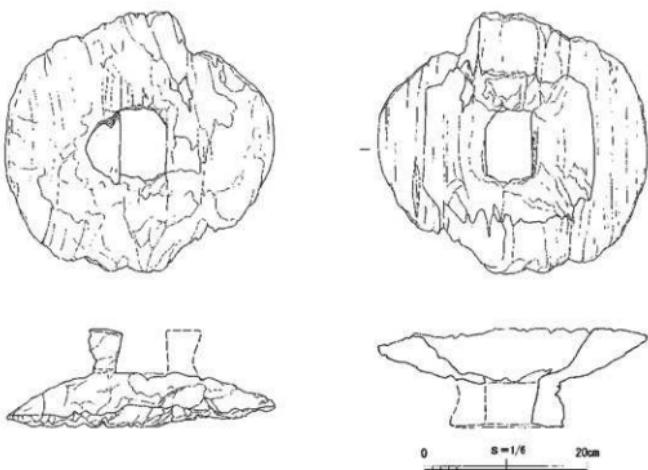
22. 笠形木製品 (KRK-072-00006W)



25. (建築) 部材
(KRK-076-00016W)

23. 鳥形木製品
(KRK-072-00004W)

写真 6 唐古・鍵 4 号墳出土木製品 (20~23: 約1/6、25: 約1/10)



第2図 笹鉢山2号墳出土笠形木製品7 (SHK-001-00006W)

降も同じとする)、写真4-1)である。1はほぼ完形品で、平面形はやや水平方向に長い楕円形となり、頂部に直径17.5cmの平坦面をもつ。木取りは、大型品に通有な半割材から1点横木取りされる典型的なものである。裏面割りは中央孔とほぼ同じ大きさの長方形で、それぞれの区別がない。このような笠形木製品は、中央孔と裏面割りの区別がなく、高い頂部突起をもたないタイプの④-a類に分類され、6世紀前半代の特徴を備えている。また、頂部に平坦面をもつものは奈良県橿原市四条1号墳、奈良県葛城市北花内大塚古墳、滋賀県栗東市狐塚3号墳、愛知県北名古屋市能田旭古墳出土の笠形木製品のなかに類例があり、これらの古墳の時期である5世紀末～6世紀前半にみられる特徴といふことができる。笠形木製品の出土数及び出土古墳数が最も多い6世紀前半代に、黒田大塚古墳例のような直径40cmを超える笠形木製品が出土している古墳は、奈良盆地にのみみられる。天理市小墓古墳(前方後円墳・80m)、葛城市北花内大塚古墳(前方後円墳・90m)、大和郡山市水晶塚古墳(帆立貝式古墳・50m)にあり、いずれもこの段階では盆地東部、南部、中央部の大型古墳と目される。黒田大塚古墳も墳丘規模に見合った大きさの笠形木製品が樹立されていたと考えることができる。2～4(写真4-2～4)は直径が20～30cmの間におさまるもので、いずれも垂直方向に欠損している。鳥形木製品頭部とみられるが、4は笠形木製品の可能性も考えられる。木取りは横木取りで、3・4は年輪曲線の渋曲度が強く、また3は節を含んでおり、小径木利用であったとみられる。

笹鉢山2号墳の笠形木製品は、10点確認できるが、ほぼ完形である製品が3点(6～8、第2図、写真5-6～8)、垂直方向に半分ないし2/3程度を欠損したものが4点(9・12・14・15)、頂部突起片が3点(10・11・13)である。破片資料には同一個体となるものが含まれている可能性があり、

実際の個体数は、10点より少なくなるとみられる。完形にちかいものでみると、平面形は水平方向にやや長いいびつな円形ないし楕円形を呈する。直径は垂直方向が27~32cm、水平方向が28~35cmの範囲におさまる。側面は高さ（頂部突起のあるものは、その直下までの高さ、以下同様）が5.6~7.0cmであり、扁平な形状を呈する。裏面割りは方形にちかく比較的大きいのに対し、中央孔は小型の長方形で非常に浅い。このような笠形木製品は、裏面割りが方形で比較的大きく、中央孔と裏面割りが段をもって区別されるタイプのもので、このなかで高い頂部突起をもつ③-a類（7・第2図）ともない③-b類（6・8）がある。この類型は5世紀末~6世紀前半にみられるものであるが、 笹鉢山2号墳例は側面がかなり扁平化しているので、6世紀前半に位置づけるのが妥当であろう。他の破片資料は、側面が扁平なもの、高い頂部突起などの特徴を有しており、③ないし④-a・b類に属するものとみられる。木取りは7・8が横木取りで、年輪曲線の湾曲度が強く、裏面が樹心にちかい。6は心持ち削り出しで、樹心が水平方向の一方に寄っている。いずれも小径木利用とみられる。石見桙木製品は1点（16、写真5-16）あり、角状突起帶中央の抉りはU字形で、表面の劣化が著しいが各部位の境に段差とみられる痕跡が観察され、本来的には一段高い部位（角状突起帶・第1段帶・第2段帶・最下帶）とそれぞれの間の低い部位（中央帶・間帶）という構成で製作されていた可能性がある。このような特徴をもつ石見型木製品は②類に分類され、6世紀前半に位置づけられる。石見型木製品の形象部長は、65cm・75cm・90cm・110cm・180cmの5つのグループにはほぼ分けることができるが、 笹鉢山2号墳例は、88.8cmを測り、90cmグループに属している。同グループにはほかに京都府亀岡市保津車塚古墳例（5世紀後半）、桜井市勝山東古墳例（6世紀前半）があり、5世紀後半に生み出された規格が6世紀前半まで引き継がれている。 笹鉢山2号墳例・勝山東古墳例は保津車塚古墳例に比較すると、形象部幅が狭く、より径の小さい木を用いて製作された可能性が考えられる。

唐古・鍵4号墳の笠形木製品は、3点確認できるが、ほぼ完形である製品が2点（20・21、写真6-20・21）、垂直方向に中央孔周辺を約1/3程度欠損したものが1点（22、写真6-22）である。完形にちかいものでみると、平面形はいずれもいびつな楕円形であるが、20は垂直方向に長く、21は水平方向に長い。直径は30cm前後ないし満たないものであり、笠形木製品としては小型の部類である。その一方で直径に対して高さの比率が比較的高く、立体的な形状を保つ。20は裏面割りが方形で比較的大きいが、割り込みは浅く中央孔は小型の長方形で、比較的深い。前述の③-b類に該当する。21は裏面割りがなく、貫通しない中央孔がぼぞ穴状に垂直に穿たれる。このようなタイプの笠形木製品は⑤-b類に分類され、5世紀後半から6世紀前半にみられる。22はさらに小型の笠形木製品で、④-b類に該当するものとみられる。22のような直径が25cmに満たない等形木製品は、大和高田市池田4号墳・石見遺跡・狐塚3号墳・能田旭古墳など5世紀末~6世紀前半の事例にみられる。木取りは21が横木取りで、年輪曲線の湾曲度はさほど強くはないのに対し、20は心持ち削り出しで、小径木利用であることがうかがわれる。鳥形木製品は1点（23、写真6-23）あり、羽部と組み合ひ飛翔する姿を立体的に表現したタイプの1類とみられる。1類は5世紀中葉ごろに出現²³するが、本例は頭部が長いのが特徴で、6世紀前半代の水晶塚古墳・石見遺跡・狐塚3号墳例のなかに類似する個体がある。これらは6世紀前半代のものであり、本例も同時期の所産とみられる。頭部には節穴が2ヶ所確認でき、小径木利用であったことがうかがわれる。

（鈴木）

4. 出土木製品の樹種

(1) 試料

試料は、黒田大塚古墳周濠から出土した木製品5点、笛鉢山2号墳周濠から出土した木製品14点、唐古・鏡4号墳周濠から出土した木製品8点の合計27点である。一部の資料は保存処理済である。

(2) 分析方法

各木製品の木取りを確認した上で、保存処理実施済みの遺物は、日立たない場所で切片採取箇所を選択し、脱脂絶に水を含ませて当て、軽く湿らせた後に剃刀で直接切片を採取する。未処理の製品は、日立たない場所から直接切片を採取する。切片採取にあたっては、可能な限り木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面を採取するようとするが、不可能な場合には柾目面を優先して採取する。切片は、マイクロチューブに入れて持ち帰り、さらに水分を十分含ませた後、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴を現世標本と比較して樹種を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、（島地・伊東 1982）、（Wheeler他 1998）、（Richter他 2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、（林 1991）、（伊東 1995・1996・1997・1998・1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(3) 結果

樹種同定結果を第1表に示す。木製品は、針葉樹3分類群（モミ属・コウヤマキ・ヒノキ（科））と広葉樹1分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節）に同定された。以下に各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

加工の関係で木口の切片が採取できず、柾目面と板目面のみの観察。軸方向組織は、観察した範囲では仮道管のみで構成される。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道及び樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1～5細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Pinus*) ブナ科

環孔材で、孔圍部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

(4) 考察

今回調査をおこなった各古墳周濠出土の笠形木製品・石見型木製品・鳥形木製品の樹種は、全て常緑針葉樹のコウヤマキに同定された。一方、棒状木製品や板状木製品など、器種が明確でない木製品は、針葉樹のコウヤマキ・ヒノキ・モミ属、落葉広葉樹のコナラ節に同定された。これらの樹種のうち、針葉樹のコウヤマキ・ヒノキ・モミ属はいずれも木理が直通で割裂性が高く、加工が容易な材質を有している。ただし、ヒノキとコウヤマキはともに耐水性が高く保存性が高いが、モミ属は保存性が低い。一方、落葉広葉樹のコナラ節は重硬で強度の高い材質を有し、加工が困難な部類にはいる。

以上の各樹種の材質からみて、笠形木製品・石見型木製品・鳥形木製品の加工性や保存性を考慮すると、針葉樹のコウヤマキとヒノキは適材といえる。しかし、実際にはヒノキが利用されることなく、コウヤマキが選択的に利用されている。

奈良県内における古墳川土木製品の樹種同定結果をみると、北花内大塚古墳、小墓古墳、御墓山古墳、四条2号墳、四条7号墳、四条9号墳から出土した笠形木製品は全てコウヤマキである（奈良国立文化財研究所 1993、金原・金原 1996、奈良県立橿原考古学研究所 2000・2001、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2000）。また、つじの山古墳、小立古墳、小墓古墳、御墓山古墳、四条1号墳から出土した石見型木製品も全てコウヤマキであり（奈良国立文化財研究所 1993、金原・金原 1996、奈良県立橿原考古学研究所 2000、桜井市教育委員会 2002）、御墓山古墳や四条1号墳から出土した鳥形木製品も全てがコウヤマキである（金原・金原 1996、奈良県立橿原考古学研究所 1987）。さらに、鶴都波1号墳（古墳時代前期）、北原西古墳（古墳時代中期～後期）、三倉堂遺跡（古墳時代中期～後期）、上5号墳（古墳時代中期～後期）などの埋葬具としての棺材も全てコウヤマキである（福田 2001、金原 1993、福田・前沢 1998、福田 2003）。これらの各遺跡の結果及び今回の結果を踏まえると、古墳の埋葬具や古墳に樹立された笠形木製品・石見型木製品・鳥形木製品などの樹物には明らかにコウヤマキの木材が特化・利用されていたことがうかがえる。なお、黒田大塚古墳出土丸太杭（5、写真4-5）は、前方部側周濠の中央で、南西側に傾いて斜めに打ち込まれた柱状のものであったが、樹種は落葉広葉樹のコナラ節であった。笠形・鳥形木製品の支柱に関する資料は少ないが、御墓山古墳、石見遺跡、四条9号墳等の資料（嶋倉 1967、金原・金原 1996、奈良県立橿原考古学研究所 2001）をみる限り、コウヤマキが選択的に利用されていることから、この丸太杭は木製樹物の支柱の用材としては、符合しないことになる。丸太杭の用途については、支柱以外の可能性を検討する必要がある。

(高橋)

5.まとめ

今回調査対象とした木製品の中で、笠形・石見型・鳥形木製品の木製樹物はいずれもコウヤマキと同定された。上述のように木製樹物の大多数が出土している奈良県下の事例は、これまですべて

コウヤマキと同定されており、今回も木製樹物=コウヤマキ製という強い樹種選択性について追認する結果となった。その木製樹物は、黒田大塚古墳例、笠鉢山2号墳例、唐古・鍵4号墳例とともに6世紀前半の形態的特徴を有することが確認された。それぞれの古墳から出土している埴輪、土器の年代観とも齟齬はないと思われる。また、黒田大塚古墳には、直径40cm以上の大形の笠形木製品が、笠鉢山2号墳には、90cmグループの石見型木製品¹⁾があり、大型古墳には大型の、中小規模古墳には相対的に小さい木製樹物が、それぞれ樹立されていたというこれまでの事例と合致することも確認された。本取りでは、横木取りで年輪曲線の湾曲度が強く、樹心にちかい位置で木取りされ、節を含む個体や心持ち削り出しの個体が各古墳で確認され、特に規模の小さい古墳である笠鉢山2号墳例、唐古・鍵4号墳例に顕著であった。これまでの笠形木製品の観察では、5世紀後半より前のものは年輪の曲線が緩やかであり、年輪密度も高い個体が多く、人径木利用を中心であったのが、5世紀後半以降、特に6世紀前半には、樹心にちかい木取り、樹心を含んだ木取り、追査日、裏面側が木表になるものなど、木取りにバリエーションがみられるようになり、年輪曲線は湾曲度が強く、木裏側は年輪幅が広く、木表側が狭いという個体がみられるようになる。5世紀後半ごろから徐々に小径木利用へと変化し、6世紀前半に顕著になるという状況に今回観察した三古墳の木製樹物も概ね合致する。

木製樹物以外の出土木製品には、黒田大塚古墳の丸太杭（コナラ節）、笠鉢山2号墳の棒状（コウヤマキ）、板状具（ヒノキ・モミ属）、唐古・鍵4号墳の板状具（ヒノキ）、部材（ヒノキ）があった。古墳周濠出土木製品のなかで木製樹物以外の器種でコウヤマキが使用される例は非常に少ない（鈴木2007）ことがわかつており、木製樹物と古墳造営あるいは古墳での何らかの行為に使用された木製品の間では、材の厳密な使い分けがあった。木製樹物の支柱であった可能性がある笠鉢山2号墳の棒状具を除くと、今回の用材傾向はまさにこのような状況を補強する結果となった。（鈴木）

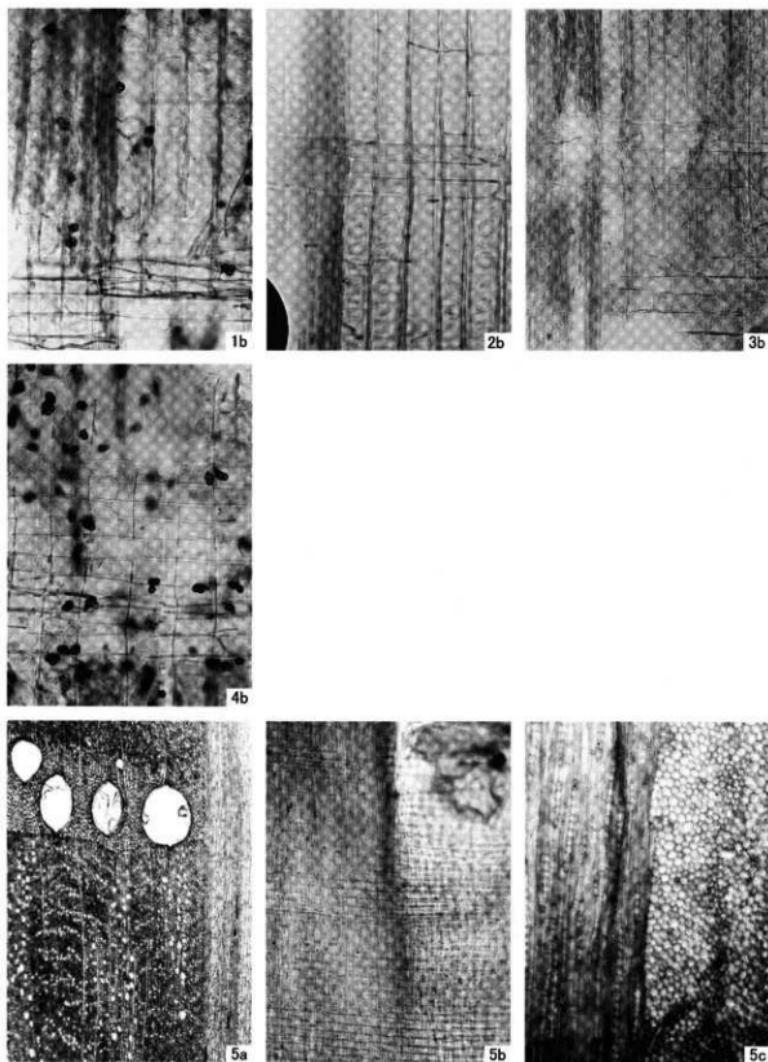
註

- 1) 笠形木製品の平面の直径などを示す場合、その方向を示す名称を以下の通りとする。笠形木製品の木取りは横木取りが主であることから、各個体において木材の成長方向（立木の垂直方向）を、垂直方向の直径何cmとし、それに對しての直交方向（立木の水平方向）を、水平方向の直径何cmと表記する。
- 2) 本報告では未掲載であるが、黒田大塚古墳出土笠形木製品には1とはほ同形同大とみられる垂直方向にほぼ半分を欠損した個体がもう1点ある（田原本町教育委員会1984）。
- 3) 大阪府堺市上野ニサンザイ古墳の鳥形木製品には、1類と側面縦を表現した板状の2-b類があり、特に前者は初現とみられる（堺市教育委員会1982）。
- 4) ②類（6世紀前半）では、墳丘長50m以上の前方後円墳ないし帆立貝式古墳には180cmグループ、一辺ないし直径20~25m前後の円・方墳には90cmグループ、一辺15m以下の方墳には65cmグループと墳丘規模に応じた形象部の大きさの違いが明確化する（鈴木2005）。

引用文献

- 伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31
伊東隆夫 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32

- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35
- 金原正明 1993 「北原西古墳出土材の樹種」『大和字陀地域における古墳の研究』
- 金原正明・金原正子 1996 「木製品の樹種同定」『御幕山古墳-上総町』『天理市埋蔵文化財調査概報』平成4・5年度
(1992・1993年)
- 堺市教育委員会 1982 「百舌鳥古墳群の調査」ニサンザイ古墳・陪塚の発掘調査報告
- 桜井市教育委員会 2002 「鶴余跡群発掘調査概要I - 小立古墳・八重ヶ森古墳群の調査-」桜井市内埋蔵文化財2001年度
度発掘調査報告書4
- 鷲倉巳三郎 1967 「大和古代木材考(第1報)」『奈良教育大学紀要(自然科学)』15
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 「国説木材組織」地球社
- 鈴木裕明 2002 「笠形木製品覚書-四条7号墳出土例を中心として-」『博古研究』第23号
- 鈴木裕明 2005 「石見型木製品について」『古代文化』第57巻第7号
- 鈴木裕明 2007 「古墳周濠から出土する木製品」『日中交流の考古学』同成社
- 田原本町教育委員会 1984 「黒田大塚古墳 第1次発掘調査概要」田原本町埋蔵文化財調査概要 2
- 田原本町教育委員会 1997 「黒田大塚古墳 第4次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報6 1996年度』
- 田原本町教育委員会 2005 「筆鉢山古墳群-第1~5次発掘調査概要-」田原本町埋蔵文化財調査概要 19
- 田原本町教育委員会 1999 「唐古・鍵遺跡 第72次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報8 1998年度』
- 田原本町教育委員会 2000 「唐古・鍵遺跡 第76次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報9 1999年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1990 「四条遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1987年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2000 「四条遺跡第25次発掘調査概報-四条7・8号墳と藤原京右京四条七坊の調査-」『奈良県遺跡調査概報(第2分冊) 1999年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2001 「四条遺跡第27次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報(第2分冊) 2000年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2000 「椎威の象徴-古墳時代の威儀具-」橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第53番
- 奈良国立文化財研究所 1993 「木器集成図録 近畿原始篇(解説)」奈良国立文化財研究所史料第36冊
- 林 昭三 1991 「日本彦木材 新微鏡写真集」
- 坂 純 2003 「鳥形木製品と古墳-古墳に樹立された木製品の性格をめぐって-」『同志社大学考古学シリーズ 墓 考古
学に学ぶ(Ⅱ) 考古学研究室開設五十周年記念』
- 稻田さよ子 2001 「埋葬施設」『慈城の前期古墳 鶴都波1号墳調査概報』学生社
- 福田さよ子 2003 「上5号墳出土鉄釘付着材の樹種」『上5号墳』奈良県文化財調査報告書第92集
- 福田さよ子・前沢都浩 1998 「三倉堂遺跡出土木棺の樹種」『青霞』奈良県立橿原考古学研究所叢書第100号
- Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (編) 2006 「針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」
- 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修)海青社
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」伊東隆夫・
藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修)海青社



1. コウヤマキ (KDO-001-00003W)
2. コウヤマキ (KDO-001-00001W)
3. コウヤマキ (KDO-001-00002W)

4. コウヤマキ (KDO-004-00001W)
5. コナラ属コナラ亜属コナラ節
(KDO-004-00003W)

300 μ m:5a
 200 μ m:5b,c
 100 μ m:1-4b

a:木口, b:径目, c:板目

写真 7 黒田大塚古墳出土木製品樹種顕微鏡写真

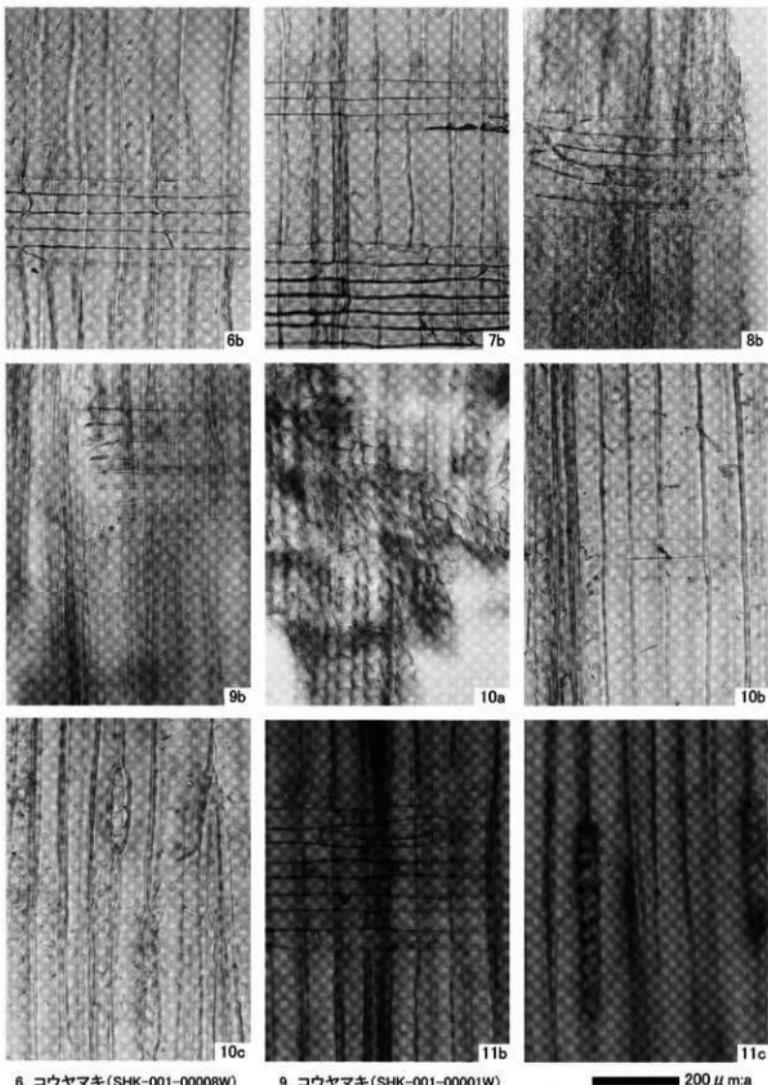
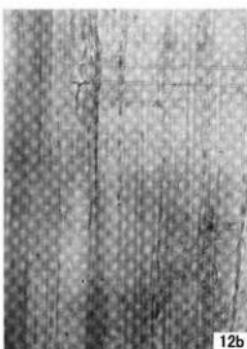
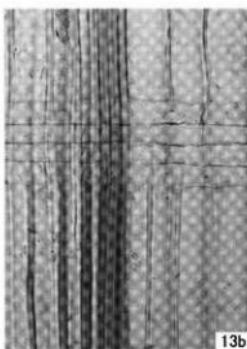


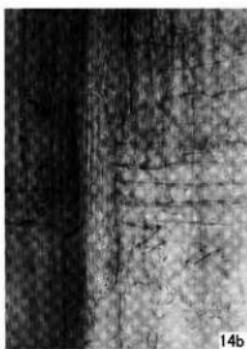
写真 8 筒鉢山 2 号墳出土木製品樹種顕微鏡写真 (1)



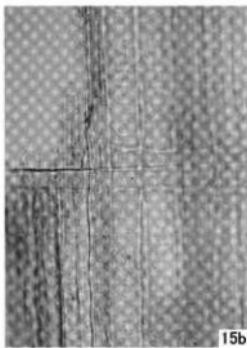
12b



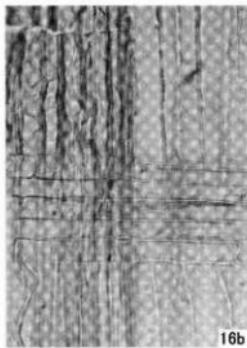
13b



14b



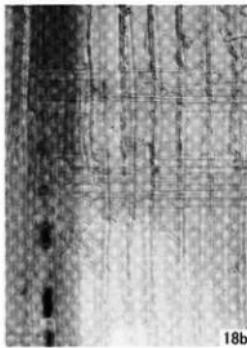
15b



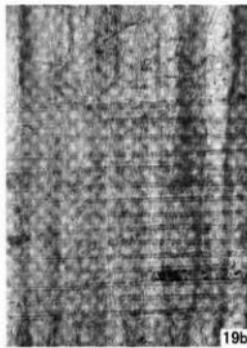
16b



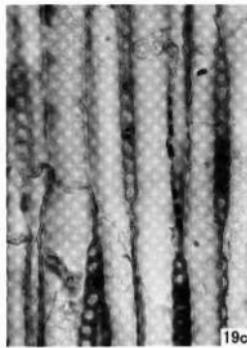
17b



18b



19b



19c

12. コウヤマキ(SHK-001-00004W)

13. コウヤマキ(SHK-001-00007W)

14. コウヤマキ(SHK-001-00010W)

15. コウヤマキ(SHK-001-00011W)

16. コウヤマキ(SHK-001-00013W)

17. コウヤマキ(SHK-001-00026W)

18. ヒノキ(SHK-001-00017W)

19. モミ属(SHK-001-00024W)

— 100 μ m

b: 桟目, c: 板目

写真 9 笹鉢山 2 号墳出土木製品樹種顕微鏡写真 (2)

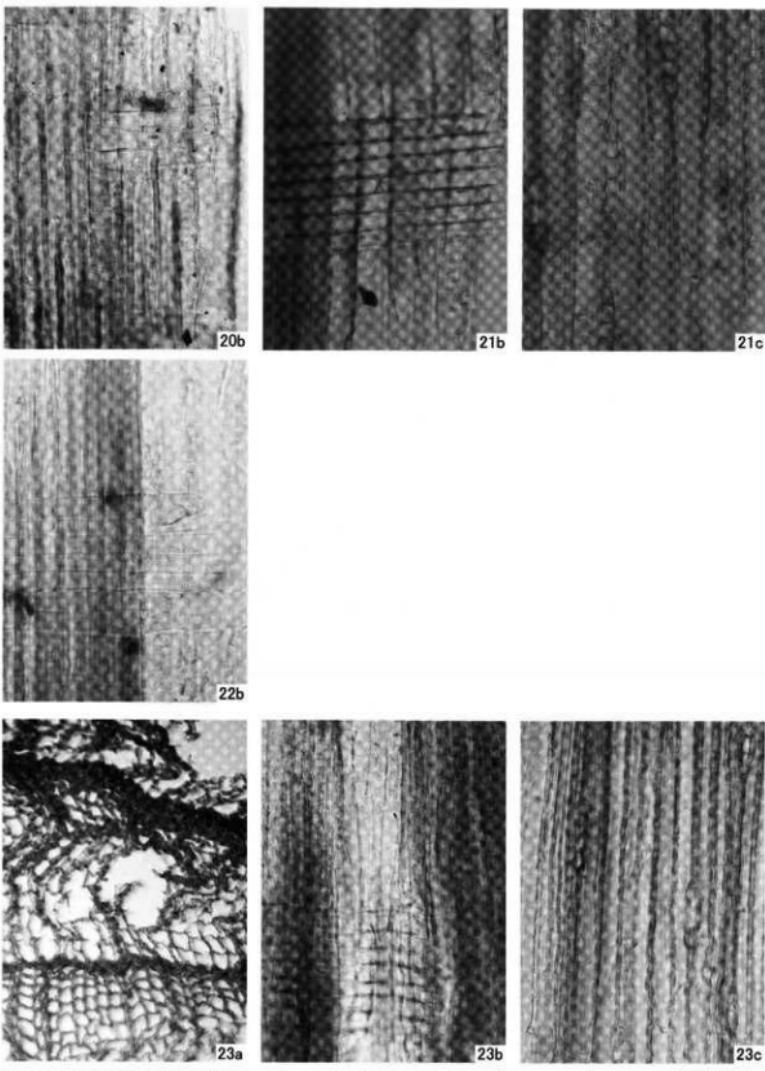
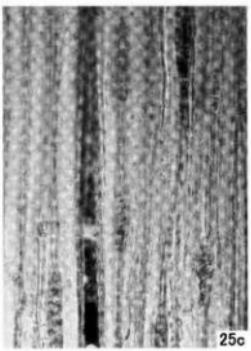
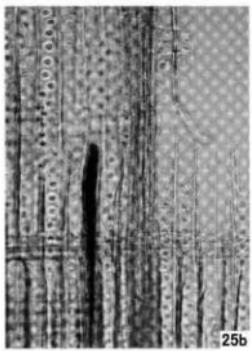
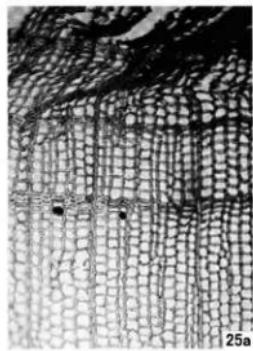
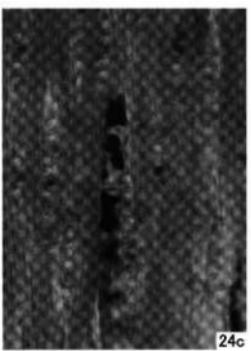
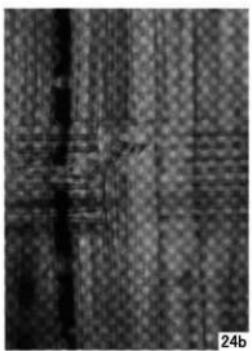


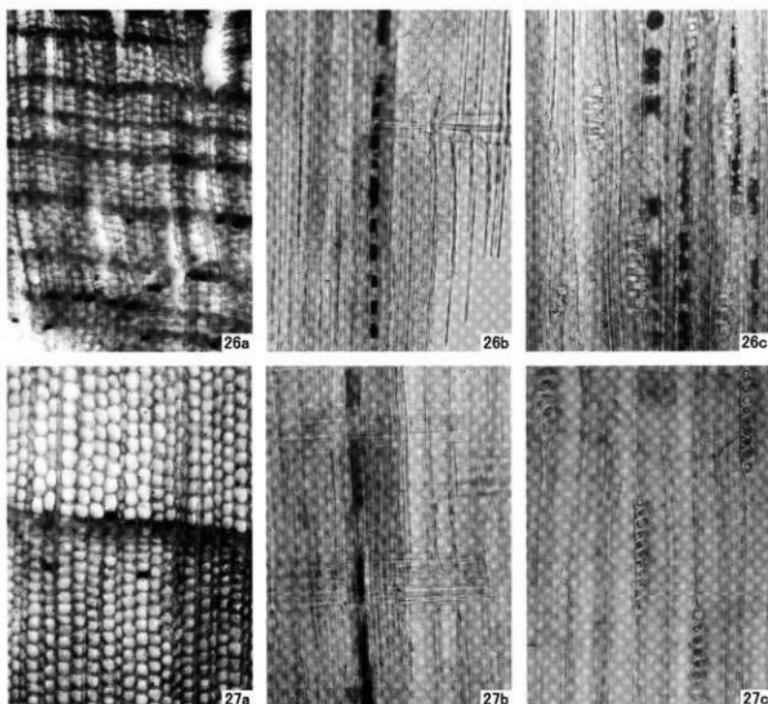
写真10 唐古・鍵4号墳出土木製品樹種顕微鏡写真（1）



24. ヒノキ科(KRK-072-00001W)
25. ヒノキ(KRK-076-00016W)

■ 200 μ m:a
■ 100 μ m:b,c
a:木口, b:柾目, c:板目

写真11 唐古・鍵4号墳出土木製品樹種顕微鏡写真(2)



26. ヒノキ (KRK-076-00013W)

27. ヒノキ (KRK-076-00015W)

— 200 μ m:a

— 100 μ m:b,c

a:木口, b:柾目, c:板目

写真12 唐古・鍵4号墳出土木製品樹種顕微鏡写真 (3)

秦楽寺遺跡の玉作りと石種同定

田原本町教育委員会

奥谷 知日朗

櫻原考古学研究所 共同研究員

奥田 尚

はじめに

秦楽寺遺跡は、田原本町南部の秦庄に所在する秦樂寺を中心とした遺跡である。遺跡南側には古墳時代前～後期の集落跡である秦庄遺跡が拡がり、遺跡東側には古代道路のドッ道が南北に走る。寺伝によれば、秦樂寺は大化三年（648）、秦河勝の創建と伝えられており、中世には寺院勢力をもち「秦樂寺城」を形成する。元亀元年（1570）、織田信長の命を受けた松永久秀により「秦樂寺城」は落城し、多くの堂宇が消失したという（二条宴乘記）。

遺跡の調査としては今回で3次を数える。寺の南西側で実施した第1次調査では鎌倉時代を中心とする遺構を検出した。遺跡南端では下水道工事に伴って第2次調査を実施し、近世大溝を検出した。この大溝は秦樂寺集落の南側環濠とみられ、室町時代まで遡る可能性も指摘されている。

今回の調査は、秦樂寺の北側にある農業用溜池の護岸改修工事に伴うものである。近世初頭に描かれた秦樂寺集落絵図には池はなく、そこには集落をめぐる二重の濠が描かれている。また享保十四年（1729）の溜池新設の請願書の存在から、池はこの請願書以降に築造されたものであろう。

平成18年度、池の護岸工事の計画がなされたことを受けて、当町教育委員会では遺構の実態を把握するため試掘調査を実施した。池の北・西・南岸に小規模なトレンチを設定し調査をおこなったところ、西岸及び南岸に古墳時代の遺構・遺物包含層が存在することが判明した。この成果を受け、本年度は北岸及び西岸について本調査・護岸工事をおこなうこととなった。本調査では、遺構密度が低いとみられる北岸に5ヶ所の部分的なトレンチを、密度が高い西岸に南北30mのトレンチを設定した。北岸東側から第1～5トレンチ、西岸を第6トレンチとする。

本調査の結果、第6トレンチにおいて古墳時代の遺構及び遺物包含層を確認し、玉類および玉作関連遺物が多数出土した。ここでは、第6トレンチで検出した遺構・遺物の概要を述べる。

1. 第6トレンチ検出遺構

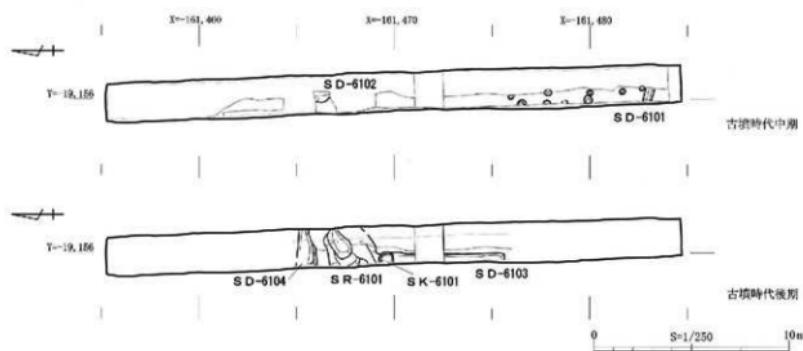
本トレンチにおける遺構検出面は2面である。第1面は古墳時代の遺物包含層である褐色砂質土層の上面で、古墳時代中後期～中世の遺構検出面である。第2面は褐色砂質土層の直下、地山層上面で、古墳時代中期の遺構検出面とみられる。ここでは古墳時代に所属する遺構について述べるが、この他、中世後半の濠や近世～現代の池遺構などを検出している。

古墳時代前期の遺構

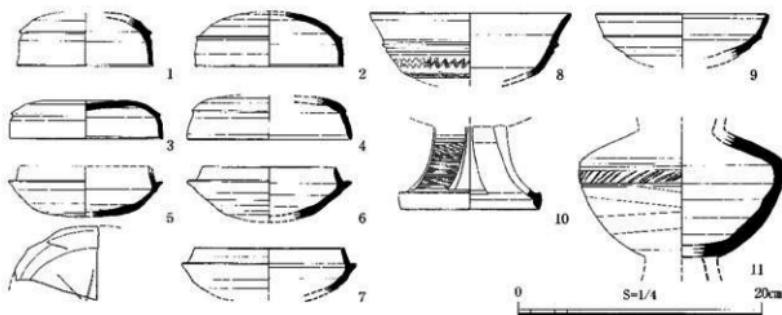
当時期に所属する明確な遺構は検出していない。しかし、出土遺物の中に布留期の遺物が含まれている。



第1図 調査地位置図



第2図 第6トレンチ古墳時代遺構平面図



第3図 SR-6101 出土須恵器実測図

古墳時代中期の遺構

S D-6101 トレンチ南端で検出した、東南東-西北西に軸をもつ小溝である。溝幅約50cm、深さは約20cmを測り、黒褐色粘質土を堆積土とする。詳細な時期は不明。

S D-6102 トレンチ中央で検出した浅い落ち込み状の遺構である。後述の S D-6104・S R-6101、中世の濠 S X-6051に大きく削平されており、遺構の全容は把握できおらず小溝ではない可能性もある。深さは約10cmを測り、黒褐色粘質土を堆積土とする。詳細な時期は不明。

柱穴 トレンチ南半で検出した9基の小土坑である。いずれも径は30~40cm、深さは10~20cmを測る。黒褐色粘質土を堆積土とする。Pit-6101からは須恵器壊身小片が出土している。

古墳時代後期の遺構

S K-6101 トレンチ中央で検出した土坑である。本土坑の西半はトレンチ外となる。平面形は円形、筒形を呈し、径約40cm、深さ約40cmを測る。灰色粘質土等を堆積土とする。断面観察では S R-6101を切っていることから、それよりも新しい遺構である。上師器小片や須恵器小片が微量に出土したのみで、詳細な時期は不明である。

S D-6103 トレンチ中央で約7mにわたって検出した、南北方向に軸をもつ遺構である。遺構の東肩部のみの検出であり、断面形も浅い皿状を呈することから、溝ではない可能性もある。深さは約10cmを測り、黒褐色粘質土を堆積土とする。北端を S K-6101・S R-6101に切られる。出土遺物は上師器小片、須恵器小片であり詳細な時期は不明。

S D-6104 トレンチ北半で検出した、東西方向に軸をもつ溝である。断面形は逆台形を呈し、溝幅約1m、深さは0.4mを測る。土層は、上層が褐灰色粘質土、下層が灰色粘土である。層序より、S R-6101より古い遺構であるが詳細な時期は不明。

S R-6101 トレンチ北半で検出した、西南西-東北東方向に軸をもつ遺構である。東側が深くなる。幅は約2.2m、深さは浅い部分で30cm、深い部分で60cmを測る。上層は灰色粗砂と黄灰色粗砂の互層、下層は暗灰色粘土を堆積土とする。遺物は比較的多く、大形の土器片が出土している。人為的な規制を受けた小規模な河跡の可能性が考えられる。

2. 出土遺物

(1) 土器

第3図はS R-6101から出土した須恵器である。1~4は壺蓋、5~7は壺身。8~10は高壺、11は台付長頸壺である。中期中頃~後期後半の時期幅をもつ。特に古墳時代中期後半~後期前半のものが多く出土しているが、これは道構周辺の遺物包含層に含まれていた遺物が混入したためと考えられる。

(2) 玉

本調査では約150点の玉製品・未成品が出土した。素材片・剝片も含めると総計約13kgを計る。

第4図には滑石(1~45)、琥珀(46~53)、流紋岩(54)の玉類未成品等を図示した。滑石製白玉未成品は荒削-形削-穿孔-研磨といった製作工程をたどることができる。1~4は荒削段階の素材片で、大きいもので約270gを測る。5~16は形削段階の白玉未成品である。方形板状の剝片も認められるがごく少数で、多くは不定形の剝片を切削して多角形片を得ていたとみられる。17~26は穿孔段階の白玉未成品及び破損品。17のみ両面からの穿孔が認められるが、本遺跡出土の白玉は基本的に片面からの穿孔がなされる。27~28は側面研磨段階である。端面の研磨は穿孔の前段階に施されるものもあり、端面研磨はその剝片の形状に応じておこなわれるようである。29~40は白玉製品で、径は3.5~6.5mm、厚さは1.5~3.5mmにはば収まる。形状は、太鼓状に側面の中央が膨らむものと、円筒状に側面が直線的になるものがある。後者には断面が台形になるものも含まれる。滑石では白玉の他、管玉(41~43)、双孔円板(あるいは有孔円板か)(44)、勾玉(45)といった未成品・製品がある。

46~52は琥珀製小玉の未成品、53は製品である。琥珀製小玉には両面穿孔が採用される。54は流紋岩製の勾玉未成品である。

第5図の55~57は碧玉の素材片、58~61はグリーンタフ素材片・剝片である。これらの石材の製品・未成品等は出土しておらず、製作品種は不明である。また、ここに図示していないが、微量ながら水晶・瑪瑙といった小剝片も出土している(写真1)。

(3) 砥石

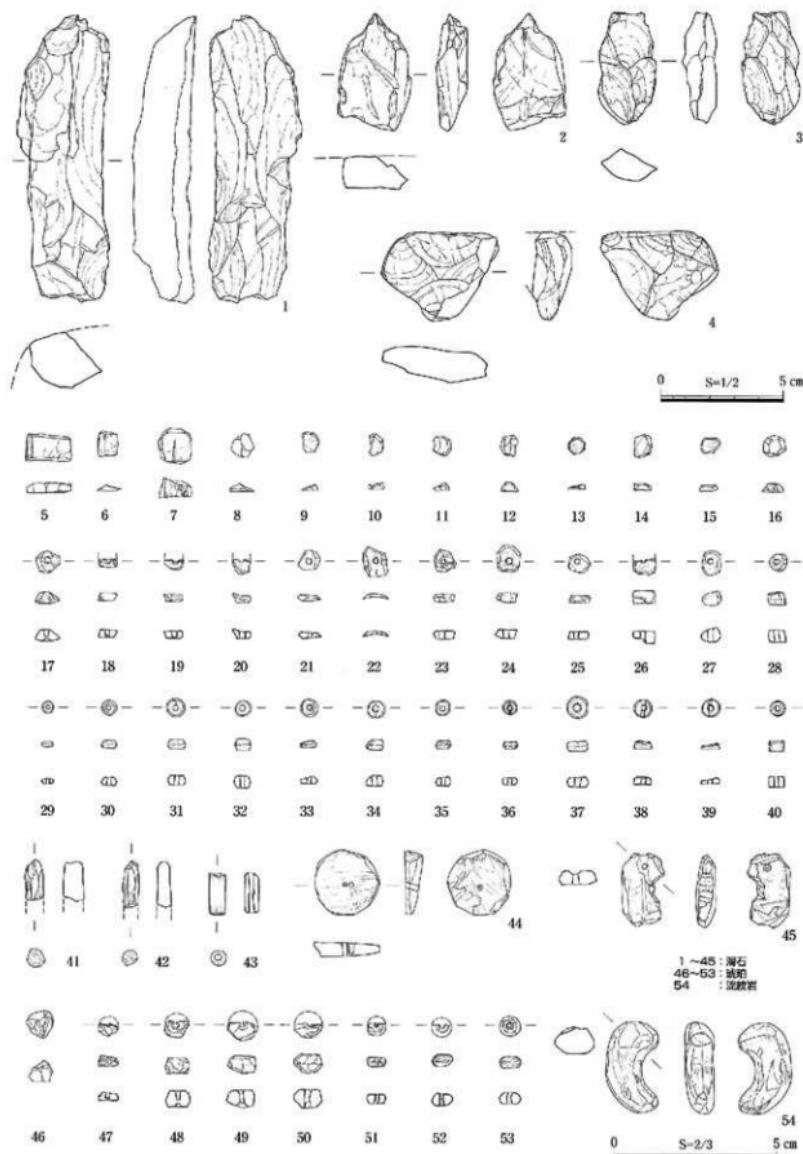
62~67は砥石である。

62は棒状の砥石である。63~65には幅5~6mmの溝がある。これらは小型の砥石で、手に持つての使用が推定される。

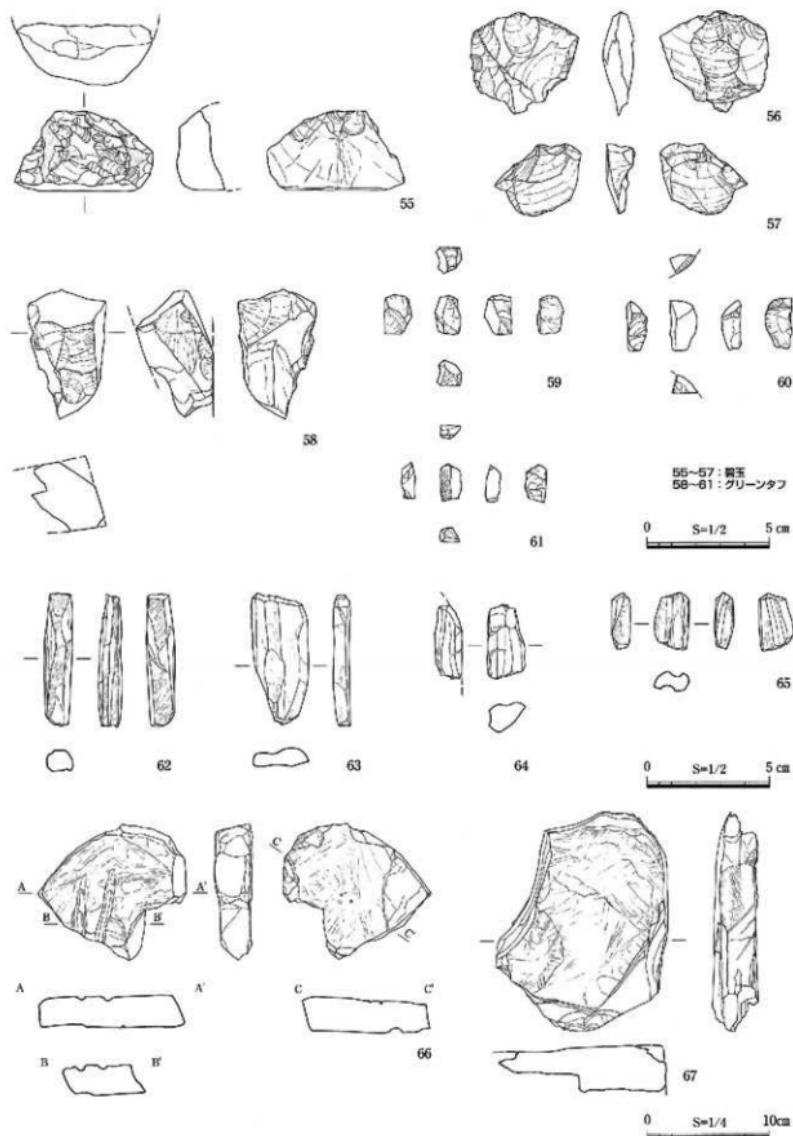
66~67は比較的大型の砥石で、置き砥石とみられる。66のa面には幅9mm、深さ3mm前後の溝2条があり、b面には径1.7mm、深さ2mm前後の穿孔痕跡が2ヶ所ある。

砥石の他、石鎧とみられる紅簾片岩片も出土している。

(奥谷)



第4図 滑石・琥珀・流紋岩製玉類



第5図 その他石材／砥石

3. 出土石材の石種と採石推定地について

(1) 石種の特徴と採石推定地

出土した石材には、玉類を製作するための原料となる石材、加工時の破片、加工時に使用する砥石などがある。これらの石材の特徴を倍率30倍の実体顕微鏡で観察し、石材の採取地を推定した。遺跡から一番近い場所で同質の石材が採取できる地を石材の採石地とした。

石材の石種は滑石、黒雲母流紋岩、流紋岩質溶結凝灰岩、石英安山岩質溶結凝灰岩、石英安山岩質凝灰岩、琥珀、石英、瑪瑙、硅質点紋片岩、黒雲母片岩、流紋岩、輝石安山岩、石英閃綠岩、斑櫛岩である。これら石材の特徴と推定される採石地について述べる。

滑石A：遺物番号1.3 加工破片である。色は灰緑色で、かすかに片理がある。構成鉱物は長石、輝石、滑石である。長石は無色透明、球状で、粒径が0.2～0.3mm、量がごく僅かである。輝石は黒色、粒状で、粒径が0.1～0.4mm、量が多い。滑石は灰色、粒径が0.2～0.5mm、量が多い。

この滑石には石綿が含まれていなく、片理が顕著でないことから兵庫県朝来市八鹿付近に分布する滑石の可能性がある。

滑石B：遺物番号2 加工破片である。色は淡灰緑色で、かすかに片理がある。構成鉱物は白雲母、長石、滑石である。白雲母は無色透明、板状で、粒径が0.05mm、量が僅かである。長石は灰白色、球状で、粒径が0.1mm、量が僅かである。滑石は淡灰色、灰色、粒径が0.2～0.5mm、量が多い。

この滑石には石綿が含まれていなく、片理が顕著でないことから兵庫県朝来市八鹿付近に分布する滑石の可能性がある。

滑石C：遺物番号4 加工破片である。色は暗灰緑色で、かすかに片理がある。構成鉱物は黒雲母、滑石である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.1mm、量が僅かである。滑石は褐色や灰色、粒径が0.2～0.5mm、量が多い。

この滑石には石綿が含まれていなく、片理が顕著でないことから兵庫県朝来市八鹿付近に分布する滑石の可能性がある。

黒雲母流紋岩：遺物番号54 色は黄土色である。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が0.1～0.2mm、量がごく僅かである。長石は灰白色で、粒径が0.2～0.3mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.1mm、量が僅かである。石基はガラス質、やや粒状である。

このような岩相を示す石は耳成山や畠傍山に分布する流紋岩の岩相の一部に似ている。

流紋岩質溶結凝灰岩：遺物番号55 色は濃緑色で、縞模様がある。顕著な溶結を示す。部分的に濃緑色の球状の斑点がみられる。斑点は粒径が0.3～1mm、量が中で、層状に分布する。構成鉱物は長石である。長石は無色透明、粒径が0.1～0.2mm、量が僅かである。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は日本海側に広く分布する緑色凝灰岩（グリーンタフ）の岩相の一部に似ている。採石地としては小松市付近が推定される。本草の分類では碧玉に相当する。

石英安山岩質溶結凝灰岩：遺物番号56.57 色は暗灰緑色で、顕著な溶結を示す。部分的に濃緑色の球状の斑点がみられる。斑点は粒径が0.5～1mm、量が僅かである。構成鉱物は石英、長石、輝石である。石英は無色透明、粒状で、粒径が0.2～0.3mm、量がごく僅かである。長石は灰白色、柱状、粒状で、粒径が0.2～0.4mm、量が多い。輝石は黒色、柱状、粒状で、粒径が0.1～0.2mm、量がごく僅かである。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は日本海側に広く分布する緑色凝灰岩（グリーンタフ）の岩相の一部に似ている。採取地としては小松市付近が推定される。木草の分類では碧玉に相当する。

石英安山岩質凝灰岩：遺物番号58～61　　色は淡灰緑色である。構成鉱物は石英、長石、輝石、緑泥石である。石英は無色透明、粒径が0.1～0.2mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒状で、粒径が0.1～0.2mm、量が僅かである。輝石は黒色透明、柱状で、粒径が0.05～0.1mm、量がごくごく僅かである。緑泥石は濃緑色、レンズ状で、縞状の方向に並び、粒径が0.2～0.4mm、量が僅かである。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は日本海側に広く分布する緑色凝灰岩（グリーンタフ）の岩相の一部に似ている。

琥珀：写真1（左）　赤褐色透明、赤色透明、黄赤色透明の破片である。モザイク状の割れ目がみられる。

岩手県や千葉県では、拳大以上の大きな琥珀を産出する地がある。しかし、小指大ぐらいの琥珀は近畿地方に分布する第四紀層にも産出することがあり、小玉ぐらいを作ることができる大きさの原石は遠地まで行かなくても採取できる。

石英：写真1（右上）　無色透明の破片である。粒径が小指大以下で、玉類の加工素材には適していない。

このような大きさの石英は奈良盆地の東側にある山地から流れる河川の砂礫中にみられることがある。採取地を限定することはできない。

瑪瑙：写真1（右下）　薄い小指大以下の破片である。灰色透明で、部分的に長石や角閃石のキャストのようなものがみられる。瑪瑙は岩石の空洞に沈着して形成されるものであり、このキャストは源岩に含まれていた鉱物の形を示していると考えられる。

出土した瑪瑙は非常に小さいもので、玉類の素材とはし難い大きさである。瑪瑙は日本海側に分布する緑色凝灰岩や火山岩の空洞に形成されている場合が多い。江戸時代から小浜や津軽は瑪瑙の産地とされている。

珪質点紋片岩：遺物番号62　　色は暗灰緑色で、片理が顯著である。灰白色の長石の球状をなす斑晶が目立つ。長石は粒径が0.1～0.3mm、量が中である。基質はややガラス質である。

このような岩相を示す石は紀ノ川流域に分布する泥質片岩で、点紋ができかけた部分に似ている。紀ノ川の中流となる大淀町から五條市にかけての付近の川原にみられる石である。

黒雲母片岩：遺物番号63　　色は淡茶灰色で、片理が顯著である。構成粒は黒雲母と輝石である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.3～0.6mm、量が中である。輝石は褐色透明、粒状で、粒径が0.5～0.7mm、量が中である。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は紀ノ川の下流付近にみられる変成度が高い片岩にみられる。
流紋岩A：遺物番号65　色は黄灰色である。火山ガラスが部分的にみられる。火山ガラスは無色透明、不定形で、粒径が0.2～0.3mm、量がごくごく僅かである。斑晶鉱物は石英、長石である。石英は無色透明、粒径が0.1～0.2mm、量が僅かである。長石は灰白色で、粒径が0.1～0.2mm、量が多い。右基はガラス質、粒状である。

このような岩相を示す石を見聞していない。

流紋岩B：遺物番号66 色は黄灰色で、流理がある。斑晶鉱物は石英、長石である。石英は無色透明、粒径が0.2~0.4mm、量が僅かである。長石は灰白色で、粒径が0.2~0.3mm、量が中である。石基はガラス質、粒状である。

このような岩相を示す石は戻傍山や耳成山に分布する流紋岩の岩相の一部に似ている。

輝石安山岩：遺物番号67 色は黄灰色で、流理が顕著である。流理面に沿って剥がれている。捕獲岩として花崗岩が含まれ、斑晶鉱物がみられない。花崗岩は灰色、粒形が亜角、粒径が0.7mm、1個で、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石基はガラス質で、細かい長石と輝石の斑晶が多くみられる。

このような岩相を示す石は羽曳野市の春日山付近に分布する春日山火山岩の岩相の一部に似ている。

石英閃緑岩：写真2（左） 色は灰色である。石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5~0.7mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が0.5~1mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が0.5~1mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が0.5~0.7mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は寺川流域に分布する石英閃緑岩の岩相の一部に似ている。

斑櫛岩：写真2（右） 色は灰白色である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2~6mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2~6mm、量が多い。輝石は灰緑色、粒径が2~4mm、量が中である。

このような岩相を示す石は三輪山や初瀬川の川原石にみられる斑櫛岩の岩相の一部に似ている。

（2）石材の使用傾向

出土した石材は玉類を製作するための原料と道具に区別される。玉類の素材に関係するものとして、石英安山岩質溶結凝灰岩、石英安山岩質凝灰岩、石英、滑石、琥珀があり、加工用の砥石などの石材に石英閃緑岩、斑櫛岩、流紋岩、輝石安山岩、黒雲母片岩がある。瑪瑙については、数mmの破片であり、1mmに満たない厚みをもつものである。勾玉や管玉を作るような大きさでない。また、発色がみられないことから加熱されていないものである。用途については不明であるが、同様の破片は唐古・鍵遺跡の第61次調査でも出土しており、唐古・鍵遺跡の遺物では融けているものもある。

玉類の原料の採石地には小松市付近や但馬、当遺跡の近隣地が推定され、砥石の原石には紀ノ川の下流、二上山西麓、当遺跡付近が推定される。

（奥出）

4.まとめ

今回の調査によって、第6トレンチ周辺において古墳時代の玉生産がおこなわれていたことが判明した。以下、その概要を示す。

玉 滑石、碧玉、グリーンタフ、琥珀、水晶、瑪瑙といった多様な石材がみられる。未だ整理途中であり図示したものはごく一部であるため石材比率の数値等を提示できないが、滑石に次いで琥珀、グリーンタフ、碧玉の順になるものとみられる。琥珀の比率が高いことは本遺跡出土玉類の特徴といえるであろう。また石材の採集地についても、滑石は兵庫県朝来市八鹿付近、碧玉・グリー

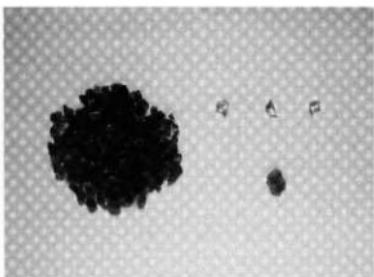


写真1



写真2

ンタフは石川県小松市付近という分析結果を得ることができた。製作品種の点では、滑石製白玉・管玉・勾玉・有孔円板、琥珀製小玉といった各種製品・未成品が確認できる。

遺構 本トレンチ設定の制限もあり、検出した古墳時代の各遺構がどのような性格・機能であるかは不明で、工房跡を検出するまでには至っていない。工房が中世秦楽寺城の濠や近世～現代の池によって破壊されている可能性も考えられるが、本トレンチ周辺に存在したことは確実である。

時期 玉生産の時期を示すことは難しい。石製玉類を多く包含していたのは、第1・2面検出遺構及び第V層である。第V層の形成は5世紀中頃～6世紀中頃で、遺物量も当時期のものが多い。集落の形成は布留期からとみられるが、本格的な発展は第V層が形成された頃と考えられる。現時点ではこの時期におこなわれていたと考えておきたい。

本地は、古墳時代中後期の玉作集落、中世前半の集落、中世後半の秦樂寺城、近世の池、といった土地変遷がなされたことが判明した。今後の周辺の調査を積み重ねにより、その詳細が明らかとなるだろう。

(奥谷)

〔謝辞〕今回の資料の報告にあたり、奈良県立橿原考古学研究所 関川尚功氏・北山峰生氏、大阪府立近づ飛鳥博物館 廣瀬時習氏にご教示頂いた。記して感謝の意を表したい。

引用文献

清水琢哉2006「秦樂寺遺跡 第1次調査」『田原本町文化財調査年報14 2004年度』田原本町教育委員会

清水琢哉・奥谷知日朗2008「秦樂寺遺跡 試掘調査」『田原本町文化財調査年報16 2006年度』田原本町教育委員会

田原本町史編さん委員会1986「田原本町史 本文編」

宮本誠1984「田原本の溜池」『田原本の歴史』第3号

法貴寺蓮光寺の総合調査

清水 琢哉・河森 一浩・奥谷 知日朗・豆谷 和之

1. はじめに

蓮光寺は、田原本町北東部の大字法貴寺に所在する浄土真宗大谷派の寺院である。創建年代は不詳である。陣内壁に掛けられていた永代護経札で最も古いものは寛文十三年（1673）であるが、これ以外は18世紀中頃以降のものであるため、創建年代としては18世紀中頃以降と考えるのが妥当と思われる。

蓮光寺の所在する大字「法貴寺」は、聖徳太子が創建し秦河勝に賜ったとされる法起寺に由来する地名である。室町時代には法貴寺を核として集落が発展し、在地勢力「法貴寺一党」の本拠地となつた。近世初頭の段階で実相院を中心に坊舎13ヶ院を数えたが、近世後半には実相院・千万院の二坊のみとなり、明治の神仏分離によって実相院も還俗・神職化した。現在法貴寺の系譜を引き継ぐのは塔頭の1つであった千万院のみである。

今回、老朽化した蓮光寺の本堂が建て替えられることになり、これに伴って解体・破壊される部分について調査を実施した。

（清水）

・蓮光寺の概要

山号 法貴山

宗派 浄土真宗大谷派（本山東本願寺）

本尊 阿弥陀如来立像（江戸時代）

・銘文・記録等

半 鍾 安永六年（1777）銘

石灯籠 文政二年（1819）銘

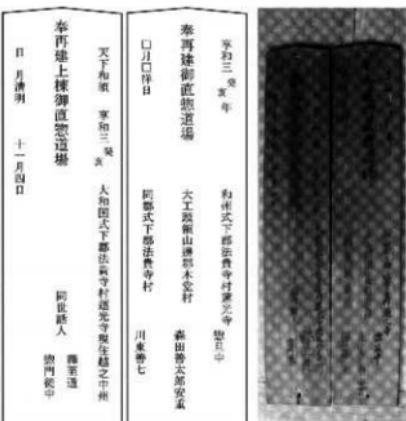
内陣奥欄間 天明七年（1787）彫物の枠裏面

に墨書き「天明七年秋門徒中寄進」

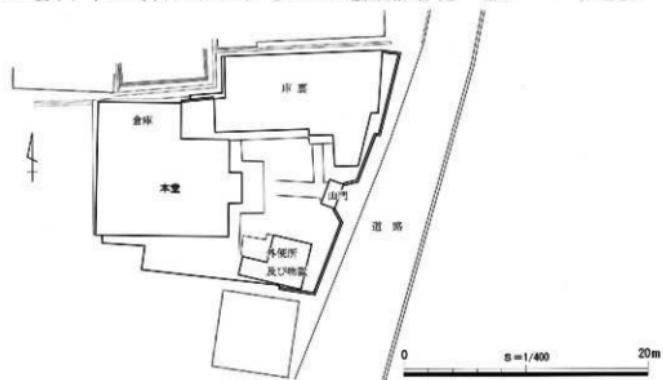
本堂棟札（第1図）享和三年（1803）「再建」

「大工棟梁 山辺郡木堂村⁽¹⁾ 森田善太郎

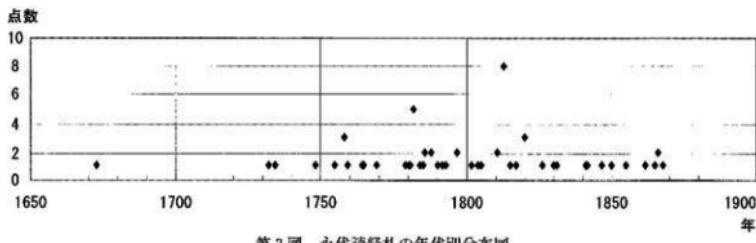
安重」



第1図 本堂棟札の略図・写真



第2図 蓮光寺の位置及び境内配置図



第3図 永代説経札の年代別分布図

永代説経札（第3図）18～19世紀のものが中心。古いものでは寛文十三年（1673）、享保十七年（1732）、同十九年（1734）等。安政五年（1853）「九條岡白殿」と記されたものあり。

文書 天保十四年（1843）の「御普請明細帳」（法貴寺区有文書）に「京東本願寺末寺 蓮光寺 庫裏
式間ニ四間半 年貢地御料 本堂四間四面」

2. 建造物の調査

解体撤去される本堂及び山門について調査を実施した。建物外部及び屋根裏の小屋組部分は清水・奥谷が、建物内部は豆谷が実測をおこなった。なお、町教育委員会による調査に先立って林清三郎先生（本町文化財保護審議会委員長）による調査がおこなわれており、本報告も林先生によるご教示・ご指導に依拠している。

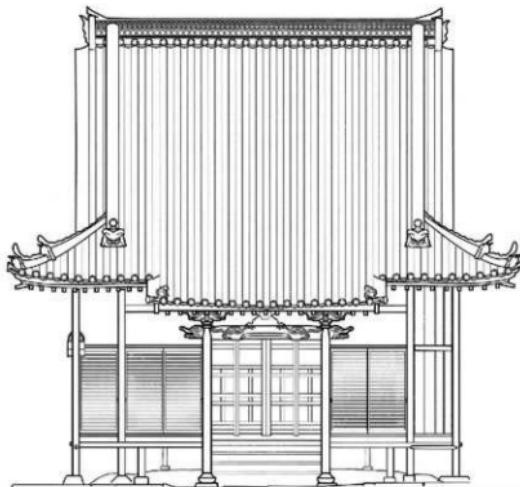
（1）本堂（第4・5図）

高さ約9.5m、南北7.98m、東西10.53m。内陣約6畳+仏壇3畳相当、外陣18畳。正面となる東側に1間の向拝がつく。また、北・東・南側に幅1m、西側に幅0.65mの回廊がめぐる。風触等から本来回廊部分は溢れ縁であり、現在みられる雨戸等は増補された可能性が考えられる。ただし、西側回廊は風触があまりみられないため、当初から外壁が存在していた可能性がある。なお、本堂北側には倉庫が増設されている。コンクリート基礎がなされており、現代のものである。

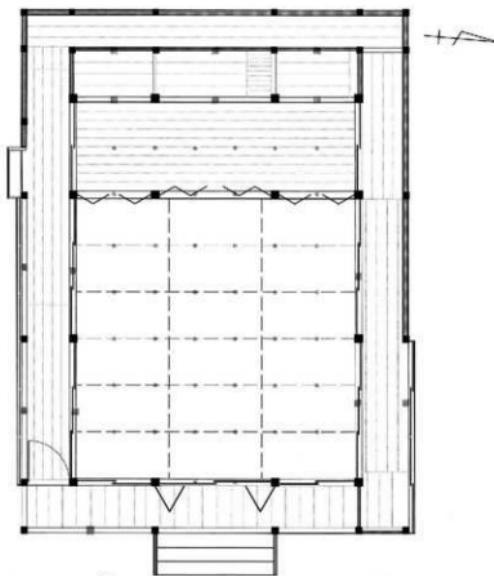
①基礎 蓮光寺は高さ1m前後の盛土の上に立地する。造成手法等については発掘調査成果報告を参照されたい。境内地の北・南・西側には石垣を有する。石垣には五輪塔地輪や台座等が転用されているものもある。

正面の東側主柱の礎石には長軸70cm前後の大形の石を用い、石の上面に方形の基部を削り出す。それ以外の主柱の礎石は長軸50～80cmの大形の割石が中心で基部の削り出しありはみられない。回廊外側の側柱と内陣・外陣を囲う入側柱の礎石規模に差異はみられない。

外陣床下を支える東柱の礎石は、簡易な自然石（長軸20～30cm程度）を置く程度で、一部は既に動いた状態となっている（床下に木材等を押し込んだ際に動いたとみられる）。この東柱礎石の一部や階段礎石には五輪塔を転用している。



正面図（東から）

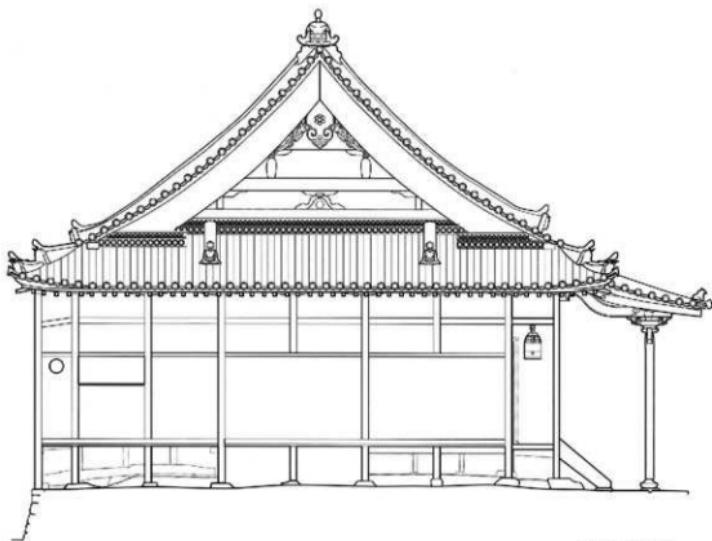


平面図

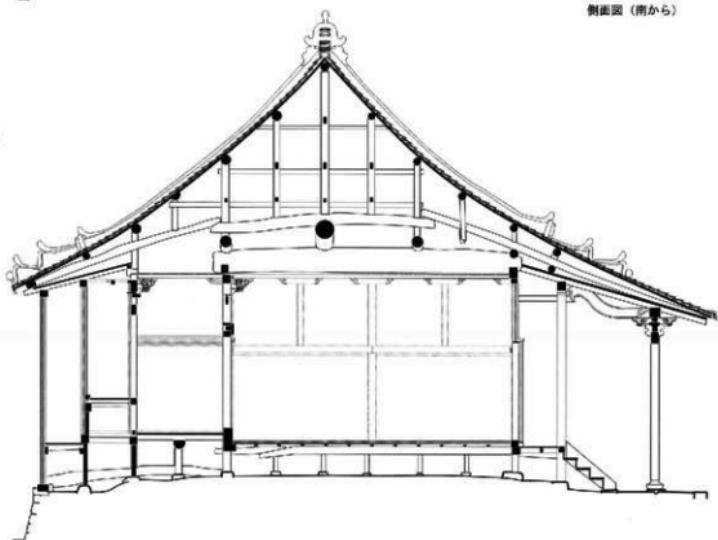
0 S = 1/100 5m

向拝柱

第4図 本堂正面・平面実測図



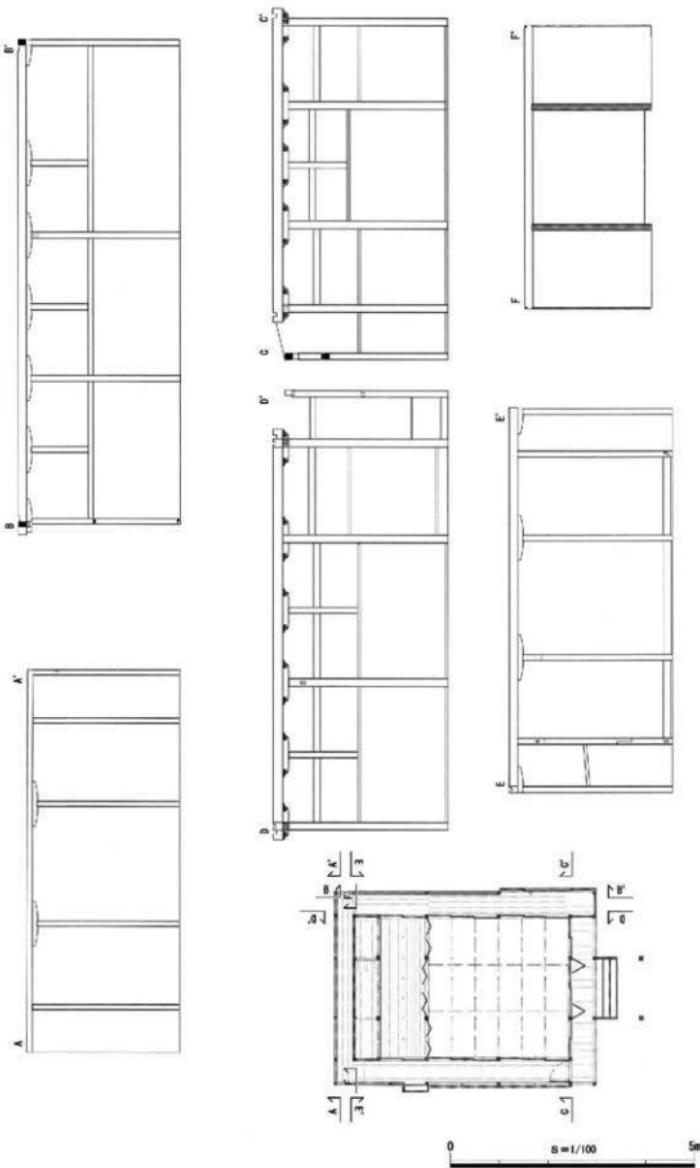
側面図（南から）



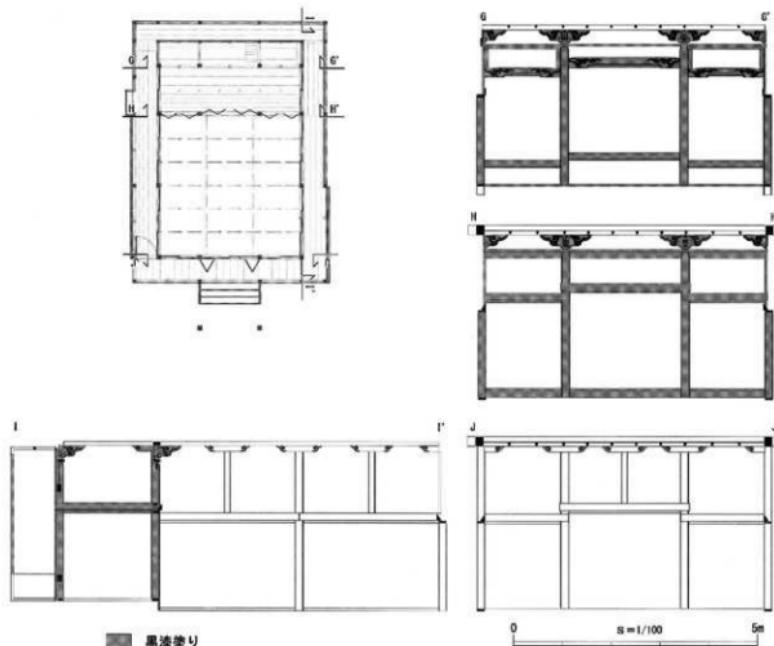
断面図（南から）

0 5m
S = 1/100

第5図 本堂側面・断面実測図



第6図 本堂内部実測図1



第7図 本堂内部実測図2

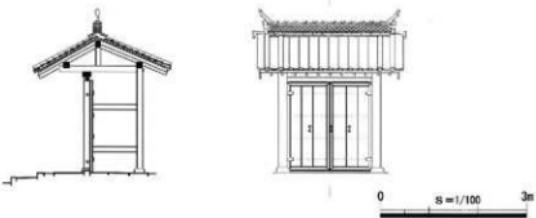
内陣床下では、太さ30cm前後の太い松材[?]を、礎石2基及び基壇西側の石垣上端の3点に跨がせて横置し、その上に主柱を立てている。内陣中央の柱4本は、この横置された丸太材が支えている。

②建物内部　柱には舟肘木が乗る。回廊の外側の肘木に彫刻はないが、回廊内側、外陣の周縁には渦状の彫刻がみられる。内陣は柱等の主要部材に黒漆塗りが施され、木鼻等に施された渦状の彫刻は朱彩を伴う。欄間の龍の彫刻は金箔で飾られる。仏壇は中央が一段高く全て黒漆塗り。内陣の主要な柱は外陣側のみ棕（ちまき）がとられる。内陣側は棕がない。これらの建築手法は18世紀後半～19世紀初頭のものとみられる。内外陣の竿縁天井や、内外陣境の巻障子は後補のものである。

③建物外部及び屋根　向拝柱の上部は棕がとられてやや細くなる。その上に大斗、絵様肘木があり、軒桁を支える。向拝柱と建物正面の側柱を大きく渋曲した海老虹梁で繋ぐ。正面の水引虹梁の上に乗る幕板には獅子の彫刻。水引虹梁の両端はやや大きめの木鼻がつく。虹梁や木鼻、幕板の文様等から19世紀中頃の様相を示す。向拝は、礎石上にのる礎盤の位置がやや片寄り、柱自体も南に傾斜している。地震などの影響か。

屋根裏では、外陣部分で直径55cmの丸太材2本を東西方向に渡している（牛梁）。この牛梁の上を南北に渡した丸太材3本が主に小屋組を支えている。

屋根は入母屋造り、本瓦葺き。軒丸瓦は巴紋。東側の軒平瓦は下が蓮弁形に膨らむものを用いる



第8図 山門実測図

が、その他は蓮華文軒平瓦である。鬼瓦には、「今里村瓦師平七」銘をもつものがある⁽²⁾。

以上から、本堂本体は18世紀後半～19世紀初頭に建立され、向拝は19世紀中頃に後付けされたものであると考えられる。

(2) その他建物

山門は、もともと法貴寺村内の旧土族の門であったが、近代前半に廃絶したために蓮光寺に移築されたという。当初は初瀬川左岸堤防上にあり、山門から本堂までの堤防斜面には13段前後の階段があった。1980年代の初瀬川河川改修の結果、堤防が削られ、山門も本堂前に移築され、現状の景観になったとのことである。

庫裏は本堂北東側に接して建てられており、比較的最近建て替えられた。旧庫裏解体時には五輪塔が多数出土したことである。
(奥谷・清水)



1. 外観



2. 内部

写真1 檻家向け説明会



1. 1966年 蓮光寺周辺の状況（北より）



2. 蓮光寺本堂側面（南より）



3. 蓮光寺本堂正面（東より）



4. 降棟鬼（鬼瓦6）



5. 南東隅の鬼瓦（鬼瓦10・14）



6. 向拝南側の獅子（鬼瓦19）

写真2 蓮光寺本堂写真（1）



1. 本堂南側妻部詳細



2. 向拝の海老虹梁



3. 向拝南側の組み物



4. 内外陣境の障子



5. 内外陣境の組み物



6. 内陣の仏壇

写真3 蓮光寺本堂写真（2）



1. 外陣北壁



2. 外陣東壁



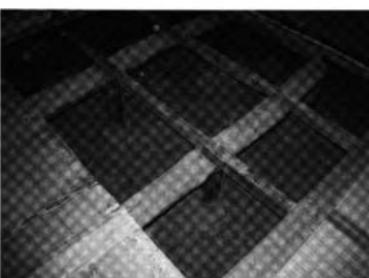
3. 南側回廊西端の天井と組み物



4. 内陣欄間の影物



5. 内陣床下の構造 (東より)



6. 外陣中央の東柱 (北東より)
東西に丸太材を渡す。

写真4 蓮光寺本堂写真 (3)



1. 屋根裏中央の小屋組 1 (南より)
建物中央の大樋を支える柱。
2本の柱に棟札の痕跡が残る。



2. 屋根裏中央の小屋組 2 (南より)
左写真下部の状況。
南北梁及び受け梁で小屋組を支える。



3. 屋根裏北東部の小屋組 (南西より)
下が中央の受け梁 (東西梁)。
中央が向拝北側を支える桔木。



4. 屋根裏北半西の小屋組 (東より)
牛梁に西側屋根を支える桔木が組み合う。

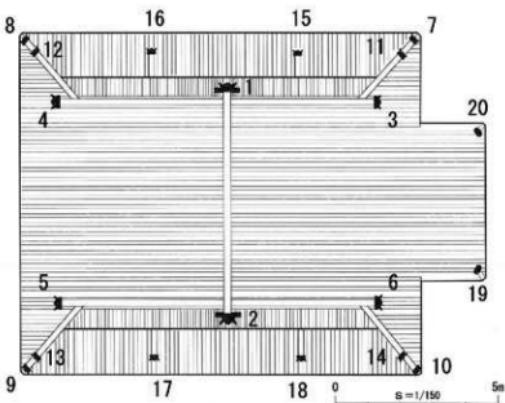


5. 屋根裏東半の小屋組 (北より)
下端に南側の牛梁。
向拝南側を支える桔木が中央にみえる。



6. 天井を吊る竹材 (東より)
南北に渡された直径10cm前後の丸太材に固定された
竹材が天井構造材を吊る形となっている。

写真5 蓮光寺本堂写真 (4)



第9図 本堂屋根伏図及び鬼瓦配置図

第1表 蓮光寺鬼瓦・飾瓦一覧表

番号	瓦種 名称	阿吽	設置位置	法量(cm)			備考	実測図
				高さ	幅	奥行		
1	大根鬼	阿	北	50	(85)	32	10	鉛無。左端欠損(コンクリート補修)
2		吽	南	50	85	32	10	鉛無
3	降根鬼	阿	東面北	30	52	25	7	鉛無
4		阿	西面北	34	47	24	9	鉛無。右角一部欠損。やや新しい?
5		吽	西面南	36	(47.5)	25	7	「今里村 瓦師平七」
6		吽	東面南	36	52.5	25.5	6.5	「今里村 瓦師平七」
7	稚児鬼	阿	北東	28	42	18.5	5.5	「今里村 瓦師平七」
8		阿	北西	25	(35)	20.5	5.5	鉛無(欠損による?)
9		阿	南西	30	43	21	6	「今里村 瓦師平七」
10		阿	南東	31	46.5	20.5	5.5	「今里村 瓦師平七」。角2本欠損
11	二の鬼	吽	北東	40	48	22.5	5.5	「今里村 瓦師平七」
12		吽	北西	38	46.5	21.5	5.5	「今里村 瓦師平七」。角2本欠損
13		吽	南西	40	44.5	21.5	6	「今里村 瓦師平七」
14		吽	南東	39	45	21	6	「今里村 瓦師平七」
15	妻降鬼	吽	北面東	27.5	40.5	18	6	直喰兼半?鉛なし
16		阿	北面西	28	40	16	6	近世兼半?鉛なし
17		阿	南面(西?)	30	42.5	19	6	「今里村 瓦師平七」。右角先端欠損
18		阿	南面(東?)	30	44	19.5	6	「今里村 瓦師平七」
19	飾瓦	阿	向拝南	35	-	39	-	鉛無
20	(獅子)	吽	向拝北	34	-	35	-	鉛無

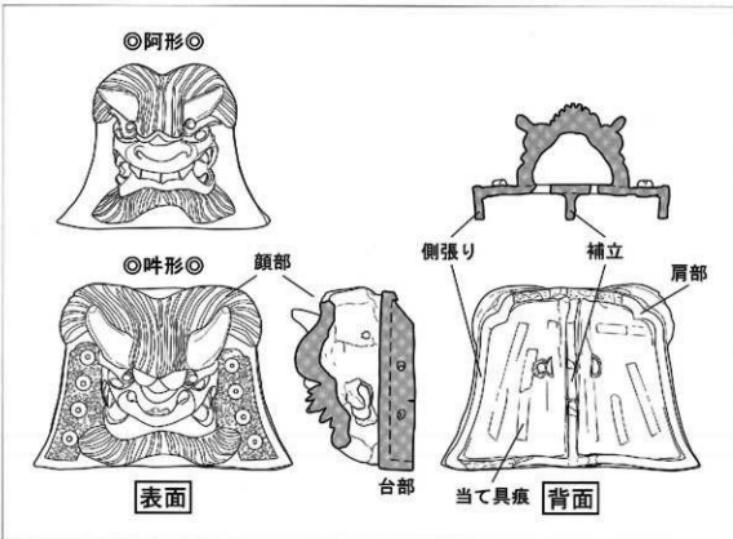
() 内の数値は、残存長

3. 瓦の調査

本堂に葺かれた鬼瓦18点と付属する鳥衾瓦2点、飾瓦(獅子)2点について報告する。このうち10点は、平成20年度春期企画展「瓦に込めた願い」の開催に際して、蓮光寺から借用し、実測・拓本・写真撮影をおこなったので掲載する。

(1) 鬼瓦・鳥衾瓦の観察

以下では、鬼瓦の設置位置に従い報告するが、前述企画展で借用した10点(鬼瓦2・6・9・11・14・15・17、鳥衾瓦1・2、飾瓦獅子1)に関しては、細部について観察できたので詳述する。



第10図 鬼瓦部位名称図

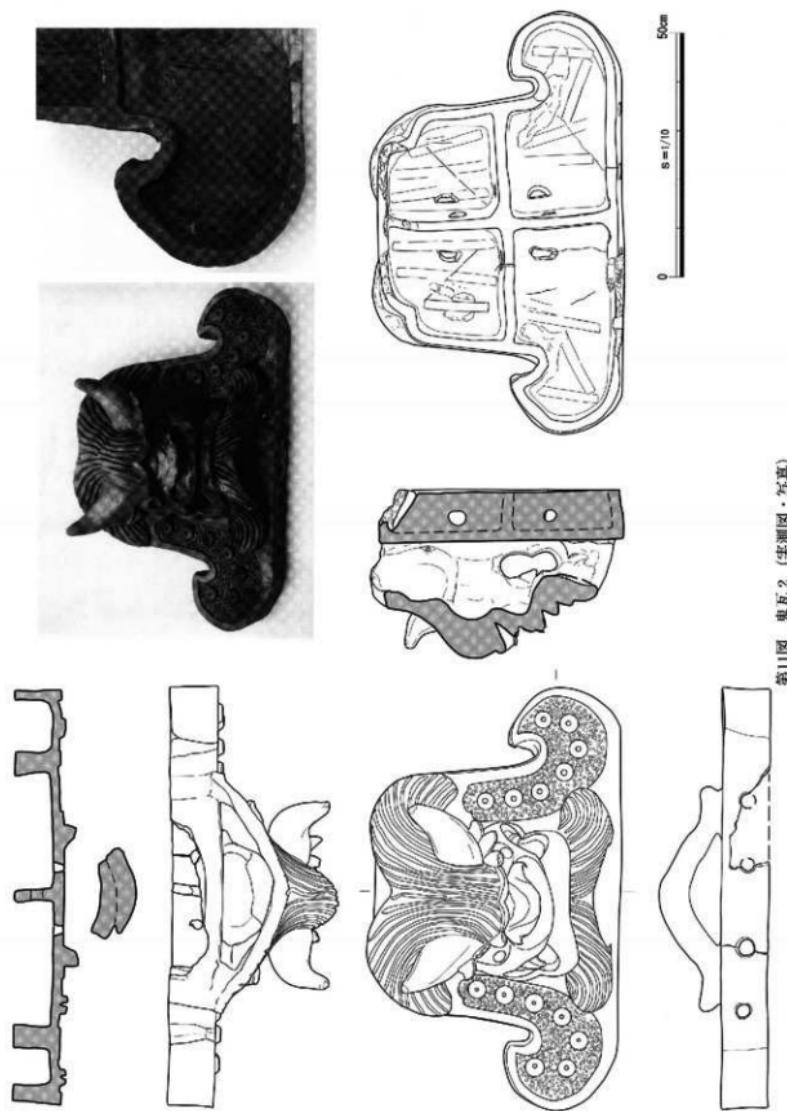
なお、鬼瓦の設置位置については第9図、鬼瓦の名称に関しては第10図を参照されたい。また実測図の顔部は、写真に基づく略図を実測図と合成した。

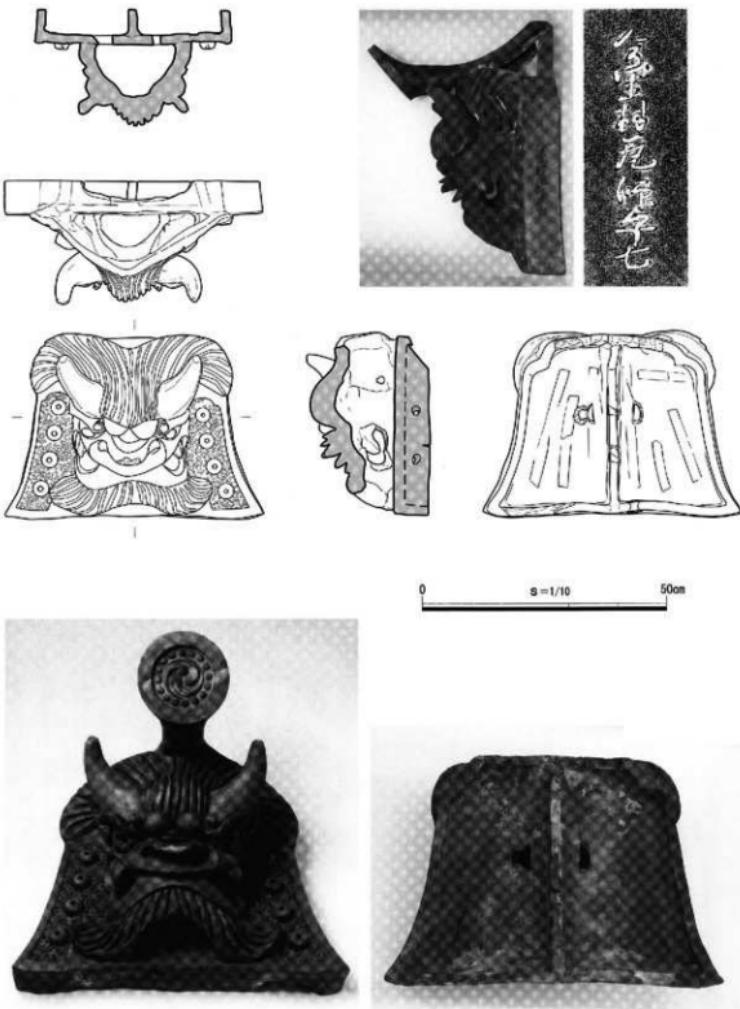
大棟鬼（鬼瓦1・2） 高さ50cm、幅85cmの大型品。北側に阿形（鬼瓦1）、南側に吽形（鬼瓦2）を配する。銘文はみられないが、「平七」銘をもつ鬼瓦と作風が類似する。

鬼瓦2（第11図）は、肩部は表面・背面とも段状を呈する。顔部は立体的で、内部は軽量化を図るために粘土を搔き取っている。背面の側張り・補立は、板状の粘土が貼り付けられハケ・ナデ調整により接合される。補立は十字形を呈する。側張りは下端部の一部を欠損するが、直径2.5cm程度を測る円形孔が4個みられる。台部裏面には縦4.5cm・横1.5cm前後を測る三日月形の孔が、補立側面には直径2.5cm前後を測る円形孔がみられる。台部裏面には、製作時の型崩れを防止したと考えられる當て具の痕跡が14ヶ所にみられ、最大長15.0cm・最大幅2.5cmを測る。

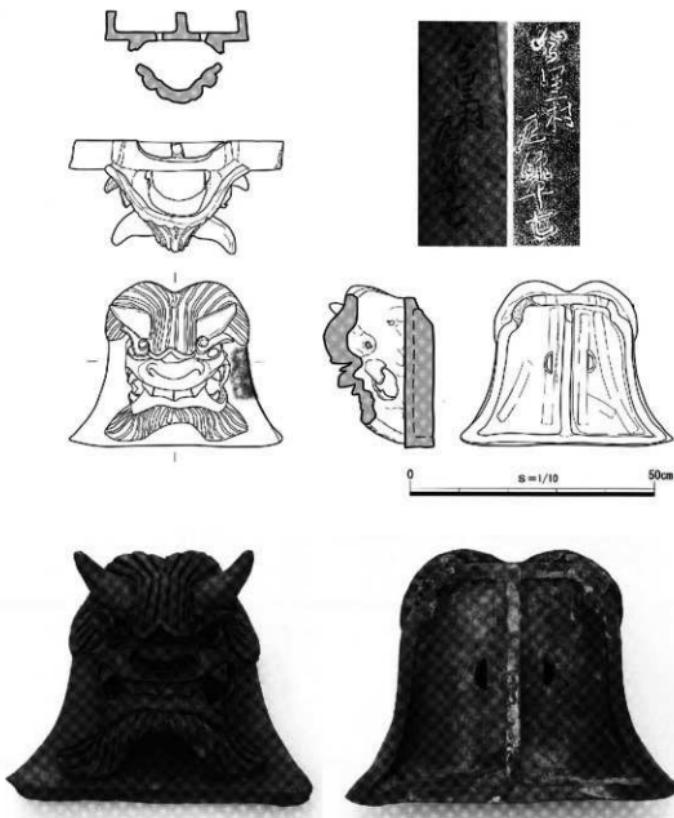
降棟鬼（鬼瓦3～6） 他に比べて、やや幅広の特徴をもつ。北側に阿形（鬼瓦3・4）、南側に吽形を配する（鬼瓦5・6）。鬼瓦5・6は、右側面に「今里村 瓦師平七」銘をもつ。鬼瓦3は銘をもたないが、5・6と作風が同じである。また、鬼瓦4は「今里村 瓦師平七」銘をもつ鬼瓦とは作風が異なり、時期や工人が違う可能性がある。

鬼瓦6（第12図）は、肩部は表面・背面とも段状を呈する。顔部の造型や、背面の側張り・補立の接合は大棟鬼と同様である。補立は直線状を呈する。中央やや上部には縦4.5cm・横1.5cmを測る三日月形の孔が、側張りの下端部には直径1.6cmを測る円形孔がみられる。台部裏面には當て具の痕跡が7ヶ所みられ、最大長19.1cm・最大幅1.8cmを測る。





第12図 鬼瓦 6 (実測図・写真・拓本)



第13図 鬼瓦9（実測図・写真・拓本）

稚児鬼（鬼瓦7～10） 四隅に配され、妻降鬼と同様に小型である。鬼瓦8が欠損により不明のはかは、台部右側に「今里村 瓦師平七」銘をもつ。いずれも阿形。

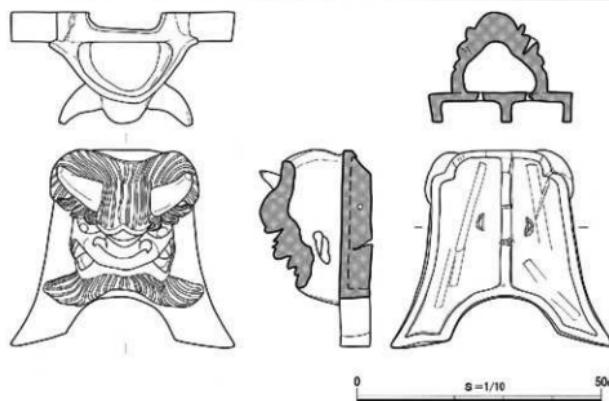
鬼瓦9（第13図）は、肩部は表面・背面とも段状を呈する。顔部の造型や、背面の側張り・補立の接合は大棟鬼と同様である。中央やや上部には縦4.5cm・横1.7cmを測る三日月形の孔がみられる。また台部裏面の當て具の痕跡は4ヶ所みられ、最大長25.5cm・最大幅2.4cmを測る。當て具の痕跡は弧状を呈する例があり、平瓦の縁辺部を利用した可能性がある。

二の鬼（鬼瓦11～14） 稚児鬼の背後に配され、裾を延長した形を呈する。鬼瓦11・12・13は正面右脇に、鬼瓦14は右側面に「今里村 瓦師平七」銘をもつ。いずれも吽形。

鬼瓦11・14（第14図）は、肩部は表面・背面とも段状を呈する。顔部の造型や、背面の側張り・

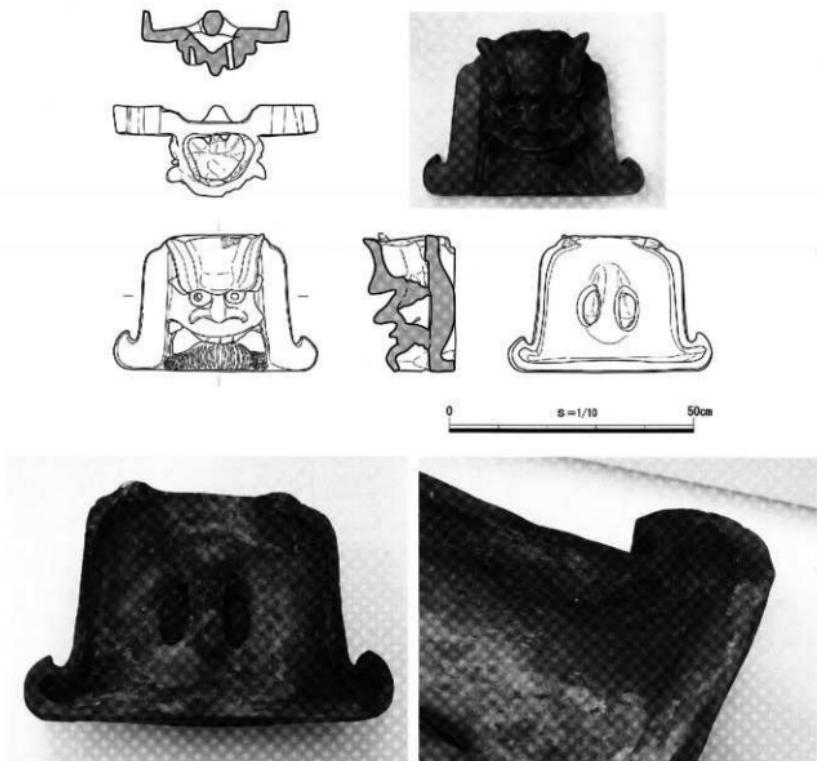


鬼瓦 11



鬼瓦 14

第14図 鬼瓦11（写真）・鬼瓦14（実測図・写真・拓本）



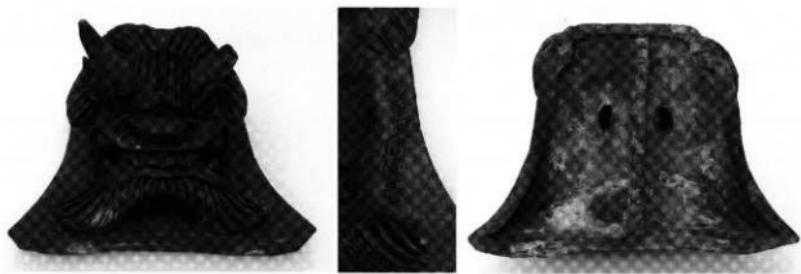
第15図 鬼瓦15（実測図・写真）

補立の接合は大棟鬼と同様である。補立は直線状を呈する。台部裏面には当て具の痕跡が5ヶ所にみられる。また中央やや上部には、鬼瓦11は直径1.4cmを測る円形の、鬼瓦14は縦3.6cm・横1.2cmを測る三日月形の孔がみられる。

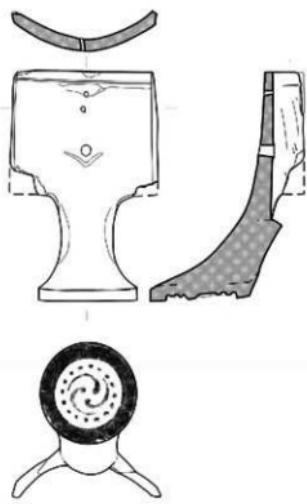
妻降鬼（鬼瓦15～18） 鬼瓦17・18は稚児鬼とほぼ同じ形態で、「今里村 瓦師平七」銘をもつ。一方、鬼瓦15・16は、「今里村 瓦師平七」銘をもつ鬼瓦と作風が異なり、時期や工人が違う可能性がある。鬼瓦15が吽形のほかは、いずれも阿形。

鬼瓦15（第15図）は、肩部は表面が段状、背面が直線を呈する。顔の上半部は合子を利用して成形され、内部は軽量化を図るために粘土を搔き取っている。一方、顔の下半部は別作りで、合子の利用はみられない。背面は削り出しにより、側張りを作り出している。ほぼ中央には、断面が円形を呈する把手がみられ、両側には縦7.2cm・横3.5cmを測る三日月形の孔が一对みられる。

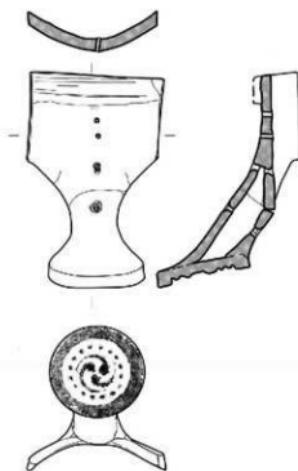
鬼瓦17（第16図）は、肩部は表面・背面とも段状を呈する。顔部の造型や、背面の側張り・補立



鬼瓦 17



鳥食瓦 1 (鬼瓦 9 付属)



鳥食瓦 2 (鬼瓦 17 付属)

0 5 = 1/10 50cm

鳥食瓦

第16図 鬼瓦17 (写真)・鳥食瓦 (実測図・拓本)

の接合は大棟鬼と同様である。補立は直線状を呈する。中央やや上部には縦4.6cm・横1.5cmを測る三日月形の孔がみられる。また台部裏面には当て具の痕跡が4ヶ所みられ、最大長14.5cm・最大幅1.8cmを測る。

鳥食瓦（鳥食瓦1・2） これまで報告した鬼瓦は、頭部や背面上端部に鳥食瓦の受け部を作り出している。以下では、鬼瓦9に鳥食瓦1が、鬼瓦17に鳥食瓦2が付属する。この鳥食瓦（第16図）は、平瓦と軒丸瓦を連結した形態を呈し、軒丸部は大きく反り上がる。軒丸部の内面には段がみられ、鬼瓦の頭部に連結する。軒丸部が中実のもの（鳥食瓦1）と中空のもの（鳥食瓦2）がみられ、このうち中空の資料については、内面に繩目痕を残す。平瓦部から軒丸部には、屋根に固定するための孔がみられる。また、軒丸部には型押しによる巴文がみられる。

飾瓦（獅子1・2） 向拝殿に葺かれた獅子形の飾瓦。獅子1は南側、獅子2は北側に配され、前者は阿形、後者は吽形。

獅子1（写真6）は、蓋部が四叉状を呈し、8ヶ所に直径0.7cmを測る円形孔があけられている。また蓋部裏面には、縦4cm・横3cmを測る長方形の孔がみられ、中空となる獅子の胴部に通じている。蓋部上面には獅子・蓮花などの造形物が貼り付けられ、獅子は右手を蓮花の上に置いている。また獅子の胴部には、ヘラ描きによる巴状の文様がみられる。

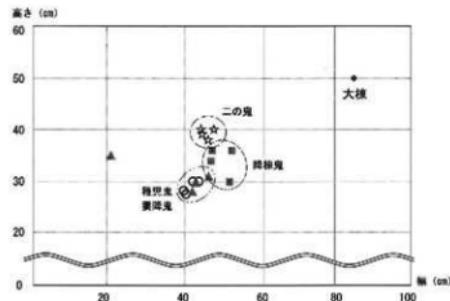
（清水・河森）

（2）鬼瓦の設置位置と形態

鬼瓦18点について、幅と高さを計測し、その比率を検討した（第17図）。稚児鬼・妻降鬼に関しては、大きな違いはみられないが、鬼瓦を葺く位置毎にサイズの類似性が認められ、設置位置を意識した大きさの作り分けが想定される。

また、鬼瓦の形態をみると、①大棟鬼は底面が直線的で両側面が羽根状に突出する、②二の鬼は底部が逆U字を呈する、③降棟鬼・稚児鬼・妻降鬼は底部が直線的な形態を呈する、といった3つの特徴がみられ、設置位置と形態の間にも関連性が認められる。特に二の鬼は、稚児鬼の背後に葺かれることから、底部を高くする工夫がみられ、用途に即した形態である。また大棟鬼は、底部の両側に別作りの鰯（写真7-1・2）を取りつけて、屋根に固定されている。

（清水・河森）



第17図 鬼瓦寸法比較グラフ